

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Nomadic Life of the Kazakh

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 九祚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004450

カザフ族の遊牧生活

加 藤 九 祚*

国立民族学博物館(以下、民博という)の中央・北アジア展示室には、中央アジアのカザフ族(中国ではハサック哈萨克と表記)のユルタ юрта(天幕)が展示されている(標本番号 H65370)。本稿は、かつて中央アジアの代表的遊牧民であったステップ(とりわけ西部)のカザフ族の革命前の遊牧生活のあらましを文献によって紹介し、その生活の拠点としてのユルタについてのべるものである。

1. カザフ族について

カザフ(またはカザーフ、ここではカザフとする)族はユーラシア内陸部の原住民である。自称をカザフ казах またはカザク казак といい、ソ連邦では15構成共和国の1つとしてカザフ共和国、中国では哈萨克(ハサック)自治州および自治県を形成している。カザフ族はソ連国内に529万9千人(1970年現在)、中国に約80万人(1978年現在)のほか、モンゴル人民共和国、アフガニスタンにも住んでいる。言語はアルタイ語族に属するチュルク語のキプチャク・グループである。

宗教はスンニ派のイスラム教。

カザフ族は1925年頃までロシア文献でキルギス・カザク киргиз-казак または単にキルギス киргиз と称せられた。ここには明らかに、カザフ族に隣接するキルギス族との混同がみられる。この理由についてトカレフはつぎのように説明している。

16—17世紀および18世紀前半のロシア文献では一般にカザクまたはカザチヤ・オルダ казачья-орда と称せられた。ところが1730年頃から、つまりカザフ族の一部がロシア帝国の治下に入ってから、キルギス・カザクとよばれるようになった。これは、一面ではロシアのいわゆるコサック(これも казак と書く)と区別するために、他面では隣接のキルギス族とよく似ているところから、文献上でキルギス・カザクまたはキルギス・カイサク киргиз-кайсаk とよばれるようになった[Токapeв 1958: 371]。

(1) カザフ族の形成

「カザフ」という言葉の起源については諸説があるが、今のところ定説はない。ある人はカス・アク(кас-ак, 白いガンの意)に由来するといい、別の人はカズ・サク(каз カズ族と сак サカ族の合成)に起源するという。また、チュルク語のカザク「自由なステップの人々」からきたとの説もある。佐口透教授は「カザーフとはトルコ語で“叛徒”“本国から離脱して自由行動をとった者”という意味である」とのべている[佐口 1978: 39]。「カザク」のこの意味は、後代にロシアの国境屯田兵の総称として移っていった。ロシア人が「カザク」の語を避けたのは、

* 国立民族学博物館第4研究部

ロシアの国境屯田兵のカザク（またはコサック）との混同を避ける意味が最大の理由だったかも知れない。

民族としての「カザフ」の起源についても、これがチンギス・ハン以前からあるとの説と、15世紀中頃であるとする説がある。現在は大体後者の見解が有力のようである。佐口教授もこの説をとり、つぎのようにのべている。カザフ族は「モンゴル帝国の4つのハン国の1つである金帳ハン国が崩壊したのち、いまのカザフ草原でモンゴル、トルコ系種族集団が離合集散した結果、形成されたウズベクという新しい民族の分派であって、ウズベク族がアブール・ハイル・ハンに率いられて西トルキスタンに移動したのに対して、モンゴルの遊牧的伝統を守る集団がカザフ草原とセミレチエ地方で、カザフと称して、金帳ハン家の末裔を擁して遊牧民国家を建てたのがおこりである」[佐口 1978: 39]。

1558年モスクワからブハラを訪れたイギリス人ジェンキンソンの旅行記には、「タシセントに戦いを挑むのはマホメットの掟に従うカザック族であり……」という表現をもってカザフ族の名で登場している [ジェンキンソン 1983: 46]。

トカレフは種族連合としてのカザフと民族としてのカザフの形成を別に考えている。彼は、民族としてのカザフ族が、形質的に見ると南シベリア型としてほぼ画一的であり、言語的にも全域を通じてほとんど変わらないところから、これだけの大民族が15世紀から19世紀までのわずか400年間に形成されるのは困難であるとし、したがって15世紀のカザフ種族連合の形成は、むしろカザフ民族形成の最終段階であろうと考えている [Токaлeв

1958: 372]。しかしいずれにしても、15世紀がカザフ族の形成史において極めて重要な時期であったことに変わりはない。

【アク-オルダ】

1227年、チンギス・ハンの長子ジュチ(1172-1224)は、父によってキプチャク大草原 *дашт-и кыпчак* に分封された。キプチャク大草原はカザフ草原ともよばれ、カザフ族の活躍の舞台であった。ジュチは、ヴォルガ河口のサライを都とするキプチャク・ハン国（金帳汗国 *Altun Ordo*, ロシア語で *Золотая Орда*）の創始者である。この王国はまたジュチ-ウルスともよばれる。

ジュチ-ウルスは14世紀初頭、白帳汗国 *Ак-Орда* と青帳汗国 *Кок-Орда*（金帳汗国の本家）という二つの王国に最終的に分裂した。白帳汗国は金帳（青帳）汗国にたいして従属的關係にあったが、しかし同じジュチの子孫ではあっても、バトゥとはちがう系譜のハン家をいただいていた。白帳汗国は主としてオルダ-エジェンの子孫、金帳汗国はバトゥとトゥガートィムールの子孫によって支配された。しかし白帳汗国はジュチ-ウルスの東部領域で、ウラル川以東の現在のカザフスタンの地（セミレチエをのぞく）およびアラル海とシルダリヤの北部地域を占めた。アク-オルダの中にはシャイバンの所領も含まれた。

アク-オルダはモンゴルの侵入以後カザフスタンに形成された最初の王国であった。「この住民は、古くからこの地に住み、モンゴルの征服以前にキプチャク部族連合に入ったチュルク語の諸部族、およびチンギス・ハンが来襲したとき、カザフスタンとアルタイの東部および南東

部から移動してきた人々であった。キプチャクのほか、ナイマン найман、ウイスン уйсун (ウシュン ушуны)、カルルク карлуки、キレイト киренты (キレイ кирен)、コングラト конграты、マンギート мангыты らの部族が住んでいた」[Нусупбеков 1979: 151]。

金帳汗国のハン、ジャニベクの死後(1359年)、ハン位をめぐるはげしい争いがおこり、アク-オルダもこれにまきこまれた。この頃中央アジアにチムールが登場し、チムールの支持を得たアク-オルダのトフタミシュ Тохтамыш は1380/81年金帳汗国のチムール-トグルクグを追放して支配権をにぎった。しかしやがてチムールとチムール-トグルクグを敵にまわしたトフタミシュは、1391年6月クンドゥズチャ川(今のクイビシェフ州にある)の決戦、つづいて1395年テレク川の戦いでチムールに破れ去った。1380年代以後、アク-オルダはウズベク-ウルスとよばれるようになった。15世紀中頃、金帳汗国は崩壊し、その旧領内にカザン、アストラハン、クリミアの3汗国が成立し、ホラズムはチムールの支配下に入った。一方、アク-オルダも著しく弱体化し、かつてその治下にあったシャイバン-ウルスの有能なハン、アブルハイル-ハン Абулхайр-хан に支配されるに至った [Нусупбеков 1979: 154]。

[モゴリスタン]

アク-オルダが栄えた頃、セミレチエの有力な部族ドゥグラト дуглаты を中心にモゴリスタン(またはモグリスタン)-ハン国が形成された。モグルまたモグルとは、「モンゴル」の中央アジア的発音であって、モゴリスタンとはペルシア語

で「モグル Mogul (蒙古) 人の国土」の意である。

14世紀にはすでに、かつてこの地に移ってきたモンゴル諸部族は、現地のチュルク族に同化され、チュルク語を話すようになっていた [Бартольд 1968: 212]。

モゴリスタンの最初のハンはチャガタイ家のトグルク-チムール Тоглук-тимур で、1348年、アルマルイク(今のクリジャ)に首都をおいた。ハン国の領土は年代によって消長したが、1480年代にはタシケントやサイラムなどの都市が含まれ、セミレチエは版図からはずれた。また16世紀初頭には、ハンの権力は東トルキスタンのカシュガルに限られた。なお、トグル-チムールは東トルキスタンに強制的にイスラムを広めたことで知られている。

前記アブルハイル-ハンのウルスは文献上で「遊牧ウズベクの国家」Государство кочевых узбеков とよばれ、西はヤイク(ウラル)川、東はバルハシュ湖、南はアラル海とシルダリヤ下流部、北はトボル川とイルティシュ川中流部をしめていた。しかしアブルハイル-ハンは1456—57年オイラト族との戦いに破れ、1468年モゴリスタンへの遠征の途中死亡し、「遊牧ウズベクの国家」は崩壊した [Нусупбеков 1979: 181]。

[ノガイ-オルダ]

金帳汗国の崩壊とアク-オルダの弱体化の過程で、カザフスタンの地に形成されたもう1つの遊牧民国家として「ノガイ-オルダ」Ногайская Орда が形成された。ノガイ-オルダの支配的部族はマンギート Мангыты で、主な領域はヴォルガ川とヤイク(ウラル)川の間のステ

ップを占め、中心はサライチク（ウラルにある）付近にあった。このオルダの人々は自らをマンガートと称した。

ノガイ-オルダの事実上の創始者は金帳汗国の重臣エディゲ Едыгеであった。彼は15年間（1396—1411）金帳汗国のほとんど全権力を手中においた人物である。ノガイ-オルダでは、ハンだけはチンギス-ハンの子孫から選出されたが、実権はエディゲの子孫の手中にあった。ノガイ-オルダには、マンガートのほか、クングラト、ナイマン、アルギン、カングル、アルチン、キプチャク、ケングレス、カルルキ、アラシュ、タマなどの部族が含まれていた。これらの部族はカザフ族の形成過程に直接関わったものとされている [Нусупбеков 1979: 183]。

16世紀中頃のノガイ・オルダについて、1558年モスクワからブハラへ旅行したイギリス人ジェンキンソンはつぎのように書いている。「彼らはホード [オルダ] と呼ばれる多くの集団に分かれ、1つ1つのホードには支配者がいて、彼らはこれを集団の王としてその命に従い、マース [ミルザ] と呼んだ。町とか家とかを彼らはまったく持たず、野外で生活を営んだが、それぞれのマースあるいは王は、そのホードすなわち領民を、彼らの妻子や家畜とともに周囲に従えており、この集団は一箇所の遊牧地を食いつくと別の遊牧地に移った。その移動のときは、大型あるいは小型の荷車の上に天幕を張ったような家を持っていて、これを遊牧地から遊牧地へとラクダに引かせ、彼らの妻も子も、それからすべての財産も、といってもそれはごく僅かだったが、これに載せて運搬した。男子はみな、少なくとも四人ないし五人の妻を持ち、その他

になお妾もいた。^{かね}金というものは使用せず、ただ彼らの家畜を、衣類その他の必需品と物々交換した。芸術と学問とかには何の関心もなく、長じているのは戦いだけで、これにかけては熟練者であった。とはいっても多くの場合、彼らは遊牧の民で、大量の家畜を養い、これが彼らの全財産であった。大いに肉類、とくに馬肉を食い、馬乳を飲み、しばしばこの馬乳で酔っ払った」 [ジェンキンソン 1983: 15-16]。

ジェンキンソンがここで書いているのは、当時のノガイ・オルダの富裕な有力者の生活と考えられる。ここで興味深いのは、彼らの住居について「小型の荷車の上に天幕を張ったような家」と書かれていることである。16世紀当時、18世紀以降のように、ユルタを分解してラクダに積んで移動するような機動性はなく、チンギス-ハン時代のモンゴルと同じだったのである。遊牧民は移動に機動性を持たせることによって、その行動範囲は著しく広がったと考えられる。

16世紀後半、カザン・ハン国とアストラハン・ハン国がロシアに併合された後、ノガイ-オルダは崩壊し、住民の一部はやがてカザフ族の小ジューズに組み入れられた。「アブルハイル-ハンの創始した遊牧ウズベクのハン国とノガイ-ウルスの住民の部族構成は、基本的には同じであった。その中には、この地域で遊牧していたチュルク語の諸部族（キプチャク、カルルク、カングル、アルギンその他）と、古来の現地住民によって同化されたが、なおモンゴルの名称を残している諸部族（マンガート、ミング、メルキート、タングートその他）が統一されていた」 [Толстов 1963: 326]。

民族としてのカザフ族は、以上あげたような遊牧的部族国家の成立と崩壊の過程に形成されたのである。

〔カザフの3 ジューズ〕

1350—1360年頃から、アク-オルダの部族たちは、それまでの伝統的自称である「キプチャク」の代わりに、文献上で「ウズベク」とよばれるようになった。クメコフは書いている。「アリストフ Н. А. Аристов, ヤクボフスキー А. Ю. Якубовский, イワノフ П. П. Иванов は『ウズベク』 узбек という言葉が金帳汗国のハンであったウズベク(1312—1342)の名に由来するとしている。セミョノフ А. А. Семенов は、『ウズベク』という言葉は東方の著者たちによって、ウズベク-ハンの領民ではなく、アク-オルダの部族にあたえたもので、したがってハンの名前とは関係のないことを論証した」[Нусупбеков 1979: 254]。ガフーロフ Б. Г. Гафуров とアフメドフ Б. А. Ахмедов もセミョノフ説を支持している[Ахмедов 1965: 11—17; Гафуров 1972: 547—548]。

カザフ草原には、いつの頃か、3つの部族連合 жуз が形成された。これはカザフ語で大ジューズ ұлы жуз, 中ジューズ Орта жуз, 小ジューズ Киши жуз とよばれた。ジューズとは部分、側を表す言葉で、ロシア語では便宜的にオルダ Орда と訳されている。ジューズはカザフ民族史の中で重要な役割を果たした(遺制的には今日まで残っている), このジューズを統合するものとして、言わばゆるい政治的な組織としての「カザフ・ハン国」が、まだアブルハイル-ハンの存命中であった15世紀後半、チュー川とタ

ラス川の流域を中心として形成された。それを支配したのはジュチ家の系統であるギレイとジャニベクの2人であった。

カザフ・ハン国はジャニベクの子カシムの時代に、ムハマッド・シャイバニとの間に長期にわたって争いをつづけ、カザフ族の勢力を著しく広げた。シャイバニは北方のシャイバン朝の出身であるが、チムール死後のチムール朝から中央アジアを奪い、ブハラを中心にシャイバン朝を開いた人物である。

1598年、シャイバン朝出身のクチュムをハンとするシベリア・ハン国が滅亡し、カザフ・ハン国とロシアとは領土を接するようになって、ユーラシア草原に新しい時代が開かれた。しかしカザフ・ハン国は3つのジューズをまとめた中央集権的な国家になることはできず、18世紀初頭のタウクのとき全く分裂し、カザフスタン全土のロシア併合までジューズが分散的な勢力を保ちつづけたのである。

(2) 16—17世紀のカザフの社会構成

カザフ・ハン国の社会構成は、単にその時代だけにとどまらず、その後ロシア革命までのカザフ社会を理解するうえできわめて重要である。

〔ウルス улус とイル нль〕

ウルスは16世紀のカザフ遊牧民の政治組織の基本的形態であった。ウルスには、モンゴル帝国の枠内における支配王朝成員の分封領の意味と、「国」という意味があった。13—14世紀のダシュト-イ・キプチャクにおけるジュチ家の所領は「ウルス・バトゥ」, 「ウルス・ベルケ」, 「ウルス・ウズベク」とよばれた。アク-オルダも、14世紀後半「ウルス・ウルス-ハ

ン」とよばれた。モゴリスタンも支配的ハンの名前をつけて「ウルス・トグルク-チムール-ハナ」Улус-Тоглук-Тимур-хана とか「ウルス-イ・モグール」Улус-и могул とよばれた。アブルハイル-ハンの汗国は「ウルス-イ・ウズベク」Улус-и узбек, つまり「ウズベクのウルス」とよばれた。

ウルスのほか、古いチュルクの概念であるイル Иль, エル Эль も広く用いられた。これは独立して用いられることも、ウルスとならべて用いられることもあった。例えばイル-イ・ウズベク ил-и узбек, イル-イ・モグール ил-и могул, イル・ワ・ウルス-イ・モグール Иль ва улус-и могул である。「イルの概念は、ウルスと同じように、国、国の住民全体、とりわけ「遊牧民族の主要な部分」である部族または部族グループを表現するのに用いられた」[Нусупбеков 1979: 188]。「全ウルスの人々を表現するのにチュルクの言葉 Эль (иль, ил) が用いられた。……ウルスの占める地域はチュルク語のイウルт Йурт とよばれた」[Султанов 1982: 78]。

スルタノフはウルスの人口について、条件によってかなり変動したと考えている。彼はさまざまな文献を整理して、天幕数（家族数）1万、人口は約6万人で、これが小ウルスを形成、この程度の小ウルスが5～7個集まって大ウルスとなり、人口は40万あまりと推定している。16世紀のカザフ・ハン国には約20の小ウルス、約3つの大ウルスが含まれていた。16世紀初頭、こうした大ウルスはジャニベク-ハンの息子たち、つまりカシム-スルタン、ジャニシ-スルタン、タニシ-スルタンらのウルスであった [Султанов

1982: 81]。

スルタノフは16世紀後半のカザフ・ハン国の総人口を120万としている。またレワシン А. Левашин は19世紀初頭のカザフの人口を男女合計250—300万と推定している [Султанов 1982: 82]。

[ハンとスルタン]

ハン国の首長はハン（汗）であり、その権力は世襲で、支配系統の年長者につたえられた。汗国の最高権力はハン的手中にぎられたが、しかし重要なことはハンの親戚であるスルタン、貴族、聖職者らの合議によって決定された。イブン・ルズビハンによれば、「チンギス-ハンの子孫はスルタンとよばれ、その中で最も有力な人がハンとなる」とのべている [Султанов 1982: 85]。またスルタノフは、ウルスのスルタンの数は18—20人を下ることはないと考えている。オスマン-トルコでは王またはハンのことをスルタンと称したが、しかし王だけでなく、オスマン朝のすべての王子、王女を意味した。中央アジアとカザフスタンでは、少なくとも遊牧ウズベクのハン国以後、スルタンはチンギス-ハンを先祖とする王朝の各成員の称号であった。スルタンと同じ意味でオグラ́н оглан またはトレ төре という言葉も用いられた。

ハン位にたいする独占的権利は、チンギス-ハンの子孫（スルタン）だけが持っていた。チンギス-ハンの子孫は、民族と国境に関係なく、なんらかの程度でモンゴル帝国の伝統を残しているところでは、ハン位を要求することができた。カザフ・ハン国はこのような遊牧国家であった。チンギス-ハンの子孫は「白い骨」ак сүйек とよばれた。1720年代以後、カザ

フの3つのジューズにおいて、それぞれの首長としてハンが現れた。これ以後、ジューズは独立したハン国となった[Султанов, 1982: 85]。

スルタンは、軍事以外の義務を負わず、また体刑をまねがれた。またスルタンの裁判をとりしきるのは年長のスルタンまたはハンだけであった。19世紀初頭においても、ふつうの人がスルタンに出会ったときには、馬から降りて、片膝をついた。スルタンはこれに答えて、自分の手を相手の肩の上においた。天幕内でも同じであった。ある人がスルタンの称号を詐称した場合には15—30回鞭で打たれた[Султанов 1982: 95]。

スルタンにはふつう多くの妻があり、息子の数が13—15人に達することは珍しくなかった。したがって、19世紀初頭のスルタンの数は1000人をはるかに上まわったと考えられる。

[ビー Бии]

ビーは、チングス-ハンの子孫に属しないカザフの氏族や部族の長である。バルトリドによれば、ビーは「古い時代のベク бек が後代に形を変えたもので、15世紀以前には見あたらないものである」[Бартольд 1964: 36]。

断片的に伝わったカザフの法令集 Жети Жаргы (7つの法規, タウケ-ハンの法令集)によれば、ビーはその支配下の氏族成員の裁判権を持っていた[Султанов 1982: 98]。ビーはハンの統治体制における重要な一環として、少なくとも4つの資格を持っていた。すなわち軍事司令官、行政官、裁判官、ステップの貴族の代表者である。

ビーは19世紀末までカザフスタンに残

っていた。1854年以後、ビーの称号はスルタンと「アウル長老」のうち6年間官職にあったもの、ツァーリ政府の任命した職務を遂行したものにあたえられた。「ステップ地域の統治に関する法令」(1868年10月21日公布)では、ビーの称号は一時的なものとなり、1891年3月25日公布の法令によって、カザフスタンにおけるビーの称号は全面的に廃止された[Султанов 1982: 100]。

[バイ Бай]

これはカザフ遊牧民において最も多数を占める支配的階層であった。бай とはチュルク語で「富める」の意であって、ファズララー・イブン・ラズビバン・イスファハニによれば、キプチャク草原およびモゴリスタンの諸部族において「富める人、多数の家畜を所有する人」の意であった。このことから、バイはかなり多数の、社会的に一樣ではないグループであって、共通点は多数の家畜の所有者、つまり富者であったと考えられる[Нусупбеков 1979: 218]。

研究者によれば、カザフスタン遊牧民の1家族(5人)が独立した生計を営むためには、ふつう15—20頭の馬、50—100頭の羊と山羊、少なくとも6頭の牛と2頭のラクダが必要である[Толстов 1963: 330]。しかしカザフの大部分の牧民の所有家畜はこの数に達しなかった。スルタノフは、19世紀、中ジューズの遊牧民の60%は独立できなかったとのデータを引用している[Султанов 1982: 101]。スルタノフは同じところで、レフシン А. Левшин の調査に基づき、バイの所有する家畜数をあげている。すなわち、羊約2万頭、ラクダ400—500頭、馬8000ない

し10,000頭に達したとのことである。

バイの称号には経済的な意義と政治的な意義の二つが含まれていた。バイは、経済的にみれば富裕であり、富裕であることによって一定の政治的意義を獲得したのである。

さきにあげた Жети Жаргы によれば、バイは、彼がスルタンまたはビーでない場合には、毎年自分の財産の20分の1をハンに納入した [Султанов 1982: 102]。

カザフにあっては、また夫婦1組のうち、夫のことをバイ、妻のことをハティン хатын またはハトゥン хатун とよんだ。古代チュルク語でバイは「富める人」「旦那」を現し、ハトゥンは「女主人」を意味した [Толыбеков 1971: 507]。トルストフは12世紀のホレズムについて書いている。「ホレズムの支配者が古代ホレズムの称号『ホレズムシャー』とアラブの称号『スルタン』を名のったとき、ホレズムシャーの第一夫人は古代チュルクの称号ハトゥンを名のった。こうしてホレズムの王妃は、王国内に入ったチュルク諸族に関して、王国の最高主権を持つ女性であることを示したのである」 [Толстов 1948: 286]。

バイは時代が下るにつれてカザフの一般民衆の生活に入り、夫は一家の長、さらにはその主要な富である家畜の所有者として、この称号を用いるようになった。同時にハトゥンは「家事を切りもりする人」の意味で、妻の称号となった。こうした用法はカザフだけでなく、ウイグル、ウズベク、キルギス、トルクメン、タタールなど多くの民族でもみられる。

[バティル Батыр]

16—17世紀のカザフ社会の特権的グル

ープに属するものとしてバティルがあった。チュルク・モンゴル語のバティル Батыр, バハドゥル Бахадур, バガトゥル Багатур は15世紀以後ロシア語に入り、バガティリ Богатырь となった。これは当初、戦いのとき敵に一騎打ちをよびかける勇敢な男の意であった [Султанов 1982: 102]。

チンギス・ハンの時代以後、バティルは封建化した軍事的・遊牧的貴族の代表者に、称号の1つとしてあたえられた。バティルはしかし、勇敢な人物の称号であるにとどまらず、職業的軍人の系列に入る人物のうち、とくに戦功のあったもの、ハンまたは有力なスルタンに近いものにあたえられた。

バティルはまた軍事的司令官の意味でもあった。「しばしばバティルはビーとハンを兼ねた。遊牧社会のそれぞれのハンは主要な軍司令官として、戦時における民衆の運命を決定した」 [Толыбеков 1971: 255]。カザフのハン、カシム、ウズベクのハン、シェイバニ、モゴリスタンのハン、スルタン-サイドはみなバティルであった。アブライ-ハンもバティルであった。18世紀になるとバティルの役割はさらに高まった。それはつぎのことわざに現れている。「主人があたえれば、バティルは受取る、あたえなければ自分で取る」、「バティルとオオカミは路上で食物を獲得する」、「強いアウルの若者は互いにバティルと呼び、弱いアウルの若者は互いに女と言う」。カザフのバティル制は、カザフのジュズがロシアに併合された時期(18世紀後半)、カザフ遊牧社会で最も強い影響力をもっていた [Толыбеков 1971: 257]。

〔アクサカル Аксакалы〕

文字通りには“白いひげ”を意味するチュルク語。バルトリドによれば、アクサカルは「事実上一定の法律上の権限なしに、自分の年齢、富、以前の功勞によって尊敬を得ている人」である。

〔シャルア Шаруа〕

一般の遊牧民のことである。ほかにカラチュー карачу という用語もあった。カザフの遊牧国家の特徴は、自由な遊牧民の人格と財産の保護は、国家機関によってではなく、全面的に氏族の団結によって確保されたことである。ビーによって代表される国家は、例えば殺された人の親族にたいする報復の権利、掠奪された者にたいする報復の掠奪 (Баранта) の権利をあたえるだけであった。したがって人々は、自分の属する氏族から離れることは、全く無防備の状態となり、ほとんど死を意味した。一般遊牧民の最大の義務は戦士になることと、現物の形で税を納めることであった。ハン国内の農耕民も税を徴収された。

〔クル кул〕

奴隷のことで、ロシア語でラビィ Рабы である。クルは証人になることができず、またどんな場合でも主人の扱いにたいして訴えることはできなかった。クルは自らの犯罪にたいして責任がなく、責任はその主人が負った。そしてクルにたいする生殺与奪の権利はすべて主人にあるとされた。

クルの供給源は捕虜、奴隷売買、負債であった。このうち捕虜が最も多かった。遊牧民は隣接する農耕民を襲い、手工業品や食糧だけでなく、捕虜をつれ去った。

そして男は奴隷市場に出され、女は妾や婢となった。

つぎに多いのは、親によって売られる子どもであった。ジェンキンソンはその旅行記の中で書いている。「余が同地にいた頃は、器量よしのタタール人の子供らをその生みの父親・母親から、望むならば1000人でも買い受けることができたろう。つまり男の子でも女の子でも、イギリスならば6ペンスくらいの値打のパンの一塊で買えたのだ」〔ジェンキンソン 1983: 20〕。こうしたことは19世紀中頃まで早ばつや飢饉のときに行なわれた。「15—18世紀のカザフの軍事・遊牧的、家父長制・封建的生活の特徴の1つは、家父長的奴隷使用 Рабство と奴隷売買 Работоторговля の存在であった。これは家父長制的・封建的遊牧社会の社会・経済の本質そのものに起源していた」〔Толыбеков 1971: 283〕。

カザフスタンにおける奴隷使用は、公式には1822年帝政ロシアの勅令によって部分的に禁止された。最終的に徹廃されたのは1875年のことである〔Султанов 1982: 110〕。

2. カザフ族の物質的生産の基礎

カザフ族は過去において、「中央アジア諸民族のうちステップ型の遊牧経済および遊牧文化の諸特徴を最も顕著に身につけていた」〔Токарев 1958: 372〕。

〔アウル〕

カザフ族の遊牧生活は、2—7戸からなるアウル(аул 中国語では阿乌尔と表記)を単位にして行なわれた。東トルキスタンのカザフ族についてみれば、「“阿乌尔”

大小不等，有的三，五家，有的十来家，有的更多一些」であった〔国家民委民族問題五種双書編輯委員會『中国少数民族』編写組 1981: 200〕。半遊牧および定住のアウルは一般に大きく、10—20戸からなりたっていた〔Толыбеков 1971: 501〕。アウルはかつて純粹に血縁集団と考えられていたが、しかし必ずしもそうではなく、血縁以外の要素もかなり入っていた。中国資料にも、アウルは「大都是同祖同父的后裔，但有时也有少数非血縁关系的成員，則多半是外部落因貧困而来依附的牧民……」と書かれている〔国家民委民族問題五種双書編輯委員會『中国少数民族』編写組 1981: 200〕。

アウルにはバイによって経営される家畜数の多いものと、家畜数の少ない、貧しい牧夫からなるものがあった。バイのアウル（ふつうそのバイの名前でよばれた）には、バイに経済的に依存している貧しい牧民の家族が含まれていたが、これはカザフ語でハラシ хараши またはコンシ консы とよばれた。そしてアウルの中央にアウルの首長の大きな白いユルタ、そのまわりに黒くよごれたハラシのユルタが建てられた。

バイの大型アウルの場合はヒツジ2000頭、ラクダ150—200頭、馬も同数かそれ以上であった。家畜の頭数はふつう、仔の育った秋に数えられた。これだけの規模の家畜を飼うにはヒツジの牧夫3—4人、ラクダの牧夫2人、馬の牧夫2—3人、全部で9—10人を必要とした。家畜の放牧だけでなく、新しい井戸の掘さく、古い井戸の清掃、水飼のために人手を必要とした。寒くなって雪が降ると、家畜が夜間休めるように除雪する必要があった。こうした労働力を全部加えると、上記の

規模のアウルで約20人の人手を必要とした。この半分はやとい入れた牧夫であり、残りの半分はバイの貧しい親族であった〔Толыбеков 1971: 527〕。

やとわれ牧夫の少なくとも半分は、一家の長として独立したユルタを持っていた。これにバイの所有する2—3張のユルタ、さらにはバイの貧しい親族のユルタ数戸を加えて、全部で12—15戸のユルタからなるアウルを形成した。

バイの貧しい親族たちは、一般に、バイと同じアウルをつくって遊牧するのは、同一祖先の子孫としての血縁関係によるものであり、バイと自分たちとの相違は家畜数だけであって、その他は同権であると考えた。彼らは相互に、年齢差によって父、母、兄弟、姉妹、嫁などと呼びあった。また、同じアウルの子どもや女性たちは、各家族の貧富を問わず、年長者にまず挨拶し、彼らを名前で呼ぶことをしなかった。若い女性は年配の男性の道を横切ってはならず、ユルタ内ではつねに上座をゆずり、隣に座っている年長者の許しなしで食べたり飲んだりしてはならなかった。食事のとき成人男子がユルタ内に入ってくると、必ず座らせてご馳走した。なにかの不幸があれば、必ず互いに援助することになっていた。

遊牧生活では、例えば役畜として必要最少限のラクダがわずか1頭不足しても、その家族にとっては死活の問題であった。ユルタの部品や生活用具が運搬できなければ、水もない砂漠あるいは荒れた草原で立往生しなければならぬ。そこでバイの貧しい親族たちは、自分たちの労働力を提供することによって、バイのラクダを貸してもらうことになる。したがって、遠距離にわたって季節的遊牧ができ

るのは家畜と人手の多いバイのアウルにかぎられた。

遊牧生活では、数カ月間同じ場所に滞在する冬と夏をのぞくと、ほとんど毎日移動した。その都度ユルタの分解と組立てをくり返し、ラクダにそれを積んだり降ろしたりしなければならなかった。井戸の水で家畜を水飼することも重労働であった。井戸の場合、長さ1.5mほどの木槽が用いられたが、200頭のヒツジに水を飲ませるには少なくとも2—3個が必要であった。2人の男が井戸から水を汲みつづけるとき、1つの槽で同時に30—40頭のヒツジ、あるいはラクダ10頭を水飼することができた[Толыбеков 1971: 522]。

かつてカザフ族の牧草地は季節によって分けられた。冬季の牧草地はクスタウ кыстау、春季のそれはコクテウ көктеу、秋季はクゼウ кузеу、夏季はジャイリャウ жайлау とよばれた。定住および半遊牧のカザフ族もそれぞれ季節的に異なる牧草地をもっていた。

冬の牧地は原則として、アシの生えた湖岸、河川の岸辺、溪流のほとり、丘陵の南斜面、起伏の大きい砂漠の中の平地が選ばれた。春の牧草地は、冬の牧草地からあまり遠くない場所で、早春に比較的早く雪の解ける場所が選ばれた。秋の牧草地は多くの場合、春の牧草地と同じか、あるいは冬の牧草地に接していた。

最も重要なことは夏の牧地の選択であった。その条件は牧草が多く、わりあい涼しく、水場が近く、しかも蚊やブヨのいないことであった。こうした条件を満たす場所はカザフ草原の北部と山地であった。砂漠および半砂漠の貧しいカザフ牧民たちは好条件の夏の牧地を利用するこ

とができず、冬の牧地にそのまま留まった。19世紀末、マンギシュラク半島とウストユルト地方では、牧民の約半数が冬季の牧草地に留まっていた。夏の牧地を確実に利用できるのは富裕なバイたちだけであった[Дахшлейгер 1980: 67]。

夏の牧地である半砂漠や砂漠では、家畜の水飼のために井戸が利用された。井戸の深さは10—100 mであった。「牧地の井戸はアウル、個々の氏族、あるいはそれを掘った家族の所有であり、遊牧のルート上にある井戸は公有であって、早い者順に利用することができた。……1873年当時のデータによれば、マンギンシュラク半島地域で井戸の総数1133、うち698がバイの所有、107が一般牧民、282が個々の氏族グループ、46が公有であった」[Дахшлейгер 1980: 70]。

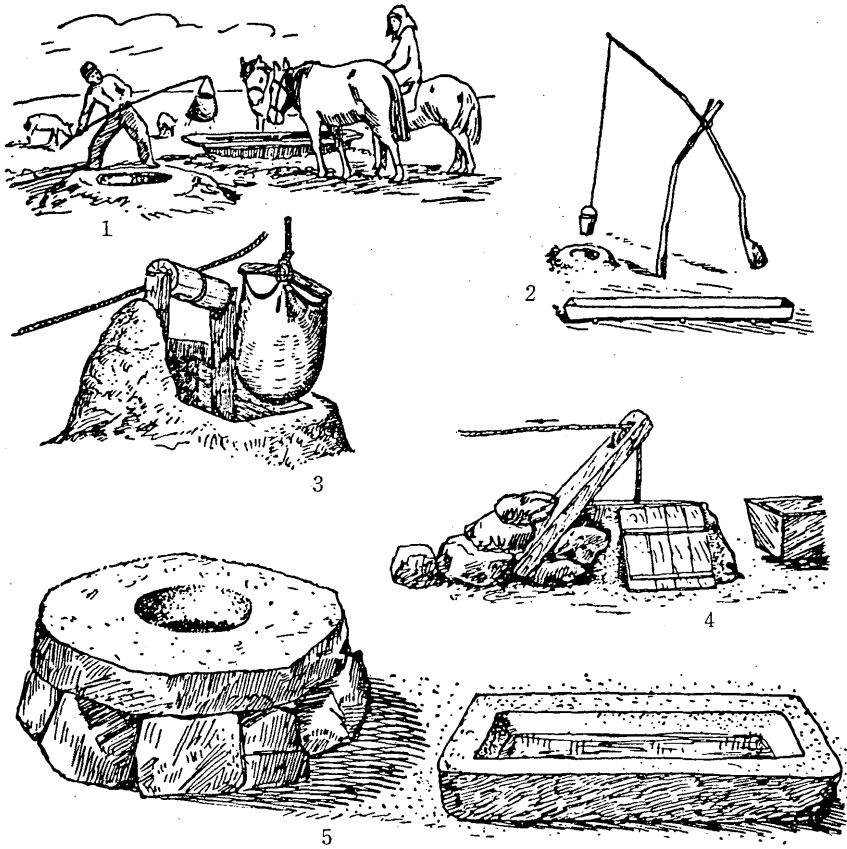
以下、カザフスタン西部の主としてカザリンスキー、ペロフスキー、イルギズスキー郡の遊牧民（ケテ、ショメケイ、トゥルトカルの3部族）について、四季の遊牧生活を概観してみよう。

[冬営地における生活]

カザフスタン西部ではかつて、キジルクム砂漠が最高の冬季牧地であると考えられた。この砂漠は80—90%植物におおわれており、また小高い丘陵がなん列にもわたって走っていて、その間の低地では吹雪が少なかった。

冬季にキジルクム砂漠を利用する遊牧民（カザリンスキー県とペロフスキー県の遊牧民）には、冬営地も固定的な建物もなかった。また草刈りも農耕もしなかった。彼らは典型的な遊牧民であった。

キジルクムは、夏季の砂の温度は70—80°Cに達し、地下水位は70—80 m、し



1) 浅い井戸 2) つるべのある井戸 3), 4) 深い井戸
5) 石で囲った深い井戸 (マンギシュラク)
図1 カザフスタンの井戸のタイプ (Дахшлейгер による)

かも塩分が多かった。また春には動物の体に食いつくダニが現れた。夏は乾燥して草が枯れ、ヤギやヒツジはほとんどふとらなかつた。

その代わり冬のキジルクムは雪も少なく、寒さもおだやかで、しかも春、夏、秋の間遊牧民の家畜が入っていないので、牧地として好まれた。彼らはこの砂漠に冬の間最高2〜2.5カ月放牧した。3月の初め、北方への移動準備をはじめた。つまり地面に雪の残っている間は、砂漠に止まることができたのである。

当時もキジルクムに井戸があったが、

全体としては少なかった。砂漠土に井戸を掘ることはほとんど命がけの仕事であった。井戸掘りの専門職人は井戸1つについて300—400頭のヒツジを要求した。

キジルクムの遊牧民たちはカラクル・ヒツジ、ひとこぶラクダ、少数のヤギを飼育した。このほか乗用として数頭の馬を所有した。彼らはヒワとブハラに家畜や畜産物を売りに出し、また貧しい人々はサクサウルでつくった木炭を焼いて都市へ売却した。

牧地の利用についてはなんの制限もなかった。ただ井戸を掘った人はその持主

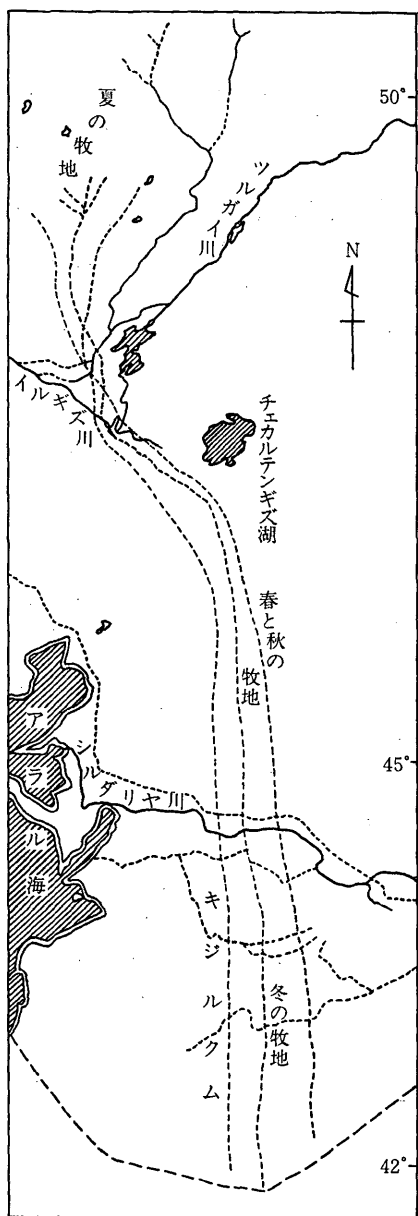


図2 19世紀末—20世紀初頭におけるカザリンスキー、イルギズスキー郡のカザフ遊牧民の季節的移動 (Толыбеков による)

とされ、他の牧民は持主の家畜の後に水飼することができた。

キジルクムでの冬季遊牧ではヒツジを400—500頭の群に分けて放牧した。そうしないと、春に生まれた1歳未満の仔羊(トフティ тохты)は飢えて死んだ。トフティは他のヒツジの後方について、残った牧草しかありつけなかったからである。そして1カ月以上同じ場所に滞留することはなかった。また極寒期には、夜間家畜のために必ず乾燥した草を敷いた。こうしないと、ヒツジ、ヤギ、ラクダなどの家畜は寒さに耐えることができなかった。

冬季の遊牧生活では、家畜を囲うための簡単な資材を携行していた。直径9-10 cm、長さ2-2.5 mのシラカバの棒を3〜4歩おきに立て、それに縄を張り、むしろをしばりつけて、家畜をかこった。

有力なパイは数人の妻を持ち、家畜を分けて、それぞれ別のアウルをつくらせていた。パイ自身は原則として、いちばん若い妻と暮したが、しかし息子たちが成人するまでは、全部の妻たちのアウルに影響力を保っていた。

息子たちが成人すると家畜を分与して独立させた。娘には分与しなかった。これは、結婚のとき、婿の方から婚資(калым)をもらうからであった。

カザフ族の遊牧民は「ヒツジの放牧を最も苦勞の多い仕事と考えていた」[Толыбеков 1971: 535]。冬季はさらに困難であった。冬季におけるヒツジの放牧は少年では無理で、自分のいる場所を的確に知り、牧地の質を決定し、風向や天候の予測のできる経験ある牧夫の仕事とされた。

牧夫は視力がよく、よく通る声の持主がのぞまれた。大声でオオカミをおどしたり、家畜の群を集めたりする必要があ

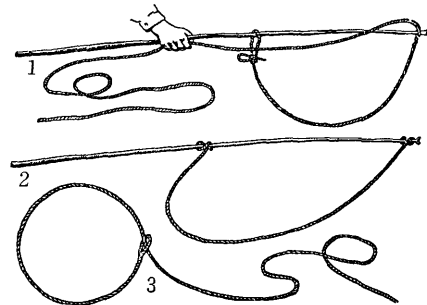
った。

こうしたことから、ヒツジの放牧は牧夫になるためのよい「学校」と考えられ、裕福な人々も自分たちの息子にこれを学ばせた。経験ある老人は、若いときヒツジの放牧を少なくとも3年したことのない者は一人前でないと考えていた。ヒツジの放牧には「40の技術」が必要であるといわれている [Толыбеков 1971: 536]。

ヒツジのほか、馬とラクダの飼育も重要な仕事であった。遊牧生活では馬が大きな役割を果たし、そのためカザフ族はとりわけ馬を大切にした。カザフ族では、美しいもの、高貴なもの、詩的なものを表現するには、必ず馬を引合いに出した。美男美女もよい馬に比べられた。馬はカザフ族にとって日常生活の友であり、客として他のユルタを訪問するときも、恋人と会うときも、戦いや狩猟におもむくときも、必ず馬に乗った。所有している馬の数はその主人の裕福の度合を示す尺度であった。

冬季における馬の放牧は、困難ではあったが、しかし名誉ある仕事とされた。馬の牧夫は夜明けの短時間以外には、1昼夜じゅう休むことができなかった。馬は牧草と水について気難しく、一たびヒツジを放牧した場所は好まなかった。そのため馬の牧夫は遠い無人のステップに、仮眠用のテントとわずかな食料と炊事用具をもって群を牧した。カザフ族には、「馬の牧夫は馬の蹄よりも堅固な人である」という言葉がある [Толыбеков 1971: 538]。

馬の牧夫は馬を捕えるために、クルク курук とよばれる長い棒を持っていた。これに縄をつけ、馬の首に投げかけ、ね



1) Бугалык 2) Күрк 3) Тұзақ

図3 馬を捕えるための道具
(Дахшлейгерによる)

じって捕えた。

遊牧民の家畜の中で、ミルクの量が最も多くて美味しく、肉と毛の質がよく、辛棒強くて力の強い動物はラクダであった。ラクダなしでは長距離にわたる遊牧生活は不可能であった。それに砂漠やステップのほとんどの植物はラクダの飼料となった。ラクダの飼育はヒツジ、馬に比べて比較的容易であった。ラクダは全体として、極めて柔順な動物である。ただ冬季は仔ラクダにフェルトのおおいを背中にかけてやり、休む場所に干草を敷く必要があった。また毎朝、ラクダつなぎ場の糞を清掃しなければならなかった。雪が降らないときの水飼も重要な仕事であった。

種用の雄ラクダの選択も経験を必要とした。ラクダには一こぶと二こぶがあったが、体力、走力、ミルクの量、毛の質などの点で一こぶがまさるが、ただし寒さに強いのは二こぶであった。そのため両種のラクダをかけ合わせるが多かった。ラクダの放牧にあたるのは、ふつう少年または老人であった。

わりあい雪の多い牧地では、家畜の種類によって放牧の順序をちがえた。最初は馬群であった。馬はその蹄で雪の表面

を踏みしだき、丈の高い良質の草だけを食んだ。馬は食べ残しが多い。この後にヒツジが放牧され、馬が踏みつぶした雪の表面に残る草をきれいに食んだ。馬とヒツジの間にラクダやヤギが入ることもあった [Дахшлейгер 1980: 79]。

遊牧民の生活において最も恐れられたのはジュト Джут とよばれる天災であった。これは早ばつの夏につづく雪の深いきびしい冬に起こった。夏の間家畜に最低量の牧草をもあたえることができず、冬もまた牧草が少なく、しかも雪が深いために放牧が困難であるのに加えて、春先雪の表面がわずかに解け、ついで訪れた大寒波のために表面が凍結して、家畜は雪の下から牧草をとり出して食べることができない。このため、大量の家畜が飢えて死ぬ。これがジュトである。ときには、雪の上に雨が降り、それが凍結することもあった。きびしいジュトに会えば、多くの遊牧民が大打撃をうけて落ちぶれた。大量の家畜が死ぬと、人間もまた餓死した。例えば1879年から1880年にかけてのジュトではアクモリンスク州で約82万頭の家畜が倒れた。これはこの州の家畜総数の約60%以上に達した。1891/92年のジュトでは、カザリンスク県では馬の90%、ヒツジの80%、ラクダの60%を失った [Дахшлейгер 1980: 542]。

家畜が衰弱して横になると、牧民はなんとかしてこれを立ちあがらせようとつとめた。こうした家畜の衰弱状態を、カザフの人々はクテレム кутерем と称した。

クテレムの状態における反応の仕方は家畜によってちがっていた。馬と二こぶラクダはなんら抵抗することなく人間の助力を受け入れたが、一こぶラクダ (ナ

ル Нар) だけは人手を拒否し、横たわったままであった。飼料をあたえても、横になったままそれを食べた。カザフの人々は、こうしたことから、人手を借りなければ立ちあがることもない老人のことをナルダイ・シェグー Нардай шөгу (老衰したナル) という [Толыбеков 1971: 544]。

天候が好転し、牧草が現れると、多くの動物たちはクテレマの状態からたちなおった。

ジュトは10—12年ごとに繰返すといわれる。そして打撃から回復するには少なくとも3—4年はかかった。中央アジア全域に広まっている十二支によれば、多くの場合ジュトは卯 (ウサギ) 年 (Коён қоян) にあたっている。カザフの人々は卯年を凶年と考えていた。もちろん、卯年以外にもジュトはあった。1911/12年のジュトは亥 (ブタ) 年 (Досыз доңыз) であったし、1918年のパウロダル郡のジュトは午 (ウマ) 年 (Жилкы жылкы) であった [Дахшлейгер 1980: 80]。

ジュトはカザフの遊牧民にとって貧富を問わず (言うまでもなく貧民のうける打撃が大きかったが) 大きな脅威であった。カザフには「富者はジュトに見舞われるまでが富者であり、豪傑は1発の弾丸のあたるまでの話である」 (Бай бір жұттық, батыр бір оқтық) という言葉がある [Дахшлейгер 1980: 81]。

冬季はカザフ遊牧民にとって、1年のうちで最もきびしい季節であったのである。

[春営地における生活]

カザリンスキー郡、ペロフスキー郡、イルギズスキー郡の遊牧民がキジルクム

の冬季牧地から移動するのは3月のはじめであった。シルダリヤの涸れ谷を越えるその移動は、1日平均 15 km であった。冬の間家畜が衰弱していて、それ以上は無理であった。しかし彼らは、家畜の出産までに、氷結したシルダリヤを渡ろうとして先をいそいだ。牧草が、シルダリヤの右岸よりも左岸の方が豊富だったからである。

春季の遊牧で、カザフ遊牧民は、家畜の頭数を増やすだけでなく、その家畜の仔を、畜群とともに1日 8-10 km、夏の牧地へ移動できるまでに育てねばならなかった。

大量の家畜の出産は、暖かくなって、草が芽を出す3月末から4月初めであった。このためには、ヒツジとヤギの交尾は前年の10月末から11月の初旬にかけて行なわれる必要があった。

家畜の大量出産時には、アウルの人々は総動員で働いた。牧夫は、仔を死なせたりすると、主人から罰せられた。仔ヒツジと仔ヤギには、最初のうち必ず母乳をあたえた。最初の15日間以内は1日午前と午後の2回母乳を吸わせ、15日が過ぎると夕方1度だけ搾乳の後に母乳をあたえた。それから4-5時間、畜群がアウルに帰るまで母親といっしょにおらせた。カザフにつぎのようなことわざがある。「生まれたとき母親の乳を飲まない仔は決してよい家畜にならない」(уызына жарымаған мал оңбайды)。ヒツジとヤギの搾乳は夕方1回だけで、牛は朝夕2回、馬は出産の1カ月後から1日5-12回、ラクダは1日3-4回搾乳した。ルデンコはアルタイ地方のカザフについて、馬の搾乳が1日5-7回行なわれると書いている [Руденко 1930: 18]。

ヒツジの15-20%、ヤギの50%がふた仔を生む。遊牧民の富の増加は、これを上手に育てることにかかっているとされ、特別の注意がはらわれた [Толыбеков 1971: 545]。

春になると、家畜は1日1日、目に見えて元気になり、体に脂がつくようになる。また仔ラクダの出現とともに、ラクダの乳をしぼった。冬の間衰弱した遊牧民たちもこれで元気を回復した。パイはその使用人たちに一定数の家畜からの搾乳を許可した。

夜間、仔ヒツジや仔ヤギは、別につくられた移動式囲い(コズィ・コラ қозы қора)に親から離して入れられることもあった。これは、母乳をより多くするためと、仔をオオカミから守るためであった。この時期、多くのオオカミが家畜の仔をねらって出沒した。

搾乳の前には、仔ヒツジと仔ヤギをコゲン коген とよばれる縄につないだ。1本のコゲンに50-60頭をつなぐことができた。搾乳が終ると順次仔を放し、夜まで親とともにおらせた。この仕事は女性の担当とされた。

搾乳の時期に、同じくらいの大きさの隣り合ったアウル間で、仔ヒツジや仔ヤギを相互にあずかることも行なわれた。これは母親のヒツジが、他の仔ヒツジに自分の乳を吸わせない本能を利用して、夜間乳をできるだけ多く貯める目的で、仔ヒツジをその母親から隔離するためであった。この隣りどうしの関係をスィバイラス сыбайлас またはコズァ・スィбай қозы сыбай (仔ヒツジのための隣どうし) と称した。毎夕方、仔ヒツジと仔ヤギをその母親と4-5時間いっしょにおらせた後、10時頃から双方のアウル

では仔ヒツジの群を交換するのである [Толыбеков 1971: 555]。こうした交換によるヒツジの母子隔離はモンゴルでも行なわれ、またはるか西方のユルックでも「カトゥシュ」という言葉で行なわれている [松原 1983a: 68]。仔ヒツジの群は翌朝日の出前に、少年の牧夫によって羊群の動く方へ向かって移動をはじめた。仔ヒツジはそのうちに、しだいに母親から離れることに馴れたのである。

春の牧地から移動する前、他人の家畜と区別できるように、1頭1頭のヤギやヒツジの左右どちらかの耳を切ったり、穴をあけたりしてしるしをつけた。このときバイは貧しい使用人の子どもたちに、その子どもたち自身の所有としてしるしをつけてあたえた。これは彼らが、夏の間中バイの多数の仔ヒツジを放牧し、ヒツジとヤギの搾乳にともなう仕事を喜んでこなすようにするためであった。

4月、春の牧地で馬の剪毛が行なわれた。1歳の雄馬(タイ тай)と3歳の雌馬(クナジン・バイタル кұнажын байтал)は尾とたてがみ、3歳の雄馬(クナン кұнан)はたてがみだけを刈り、4歳の雄馬(ドネン донен)はどの部分の毛も刈らなかった。仔を生まぬ雌馬は年齢を問わず尾とたてがみを刈りとった。この結果、大きくなった雌馬からは800g、若い雌馬からは約400gほどの毛が得られた。これと同時に1歳馬にしるしをつけたが、中には左右どちらかの鼻口(タヌ・シェク тану шек)に小さな切れ目を入れる部族もあった。また馬の多い場合には、ふつう3歳馬と4歳馬の調教をした。これは、馬に脂がのる前の4月に行なわれた。この時期にはさらに、3—4歳の雌馬10—15頭に毛なみのよい若い雄

馬1頭をつけた馬群をつくった。この馬群が互いに馴れるように10—15日間他の群から放し、雌馬の前足2本をいっしょにしばった。この時期に、雄馬は全部の雌馬に種つけをし、しかも自分の群を熱心に他の群から守った。この雌雄の馬の群の編成は、馬の質を左右する重要な仕事であった。

この時期、ラクダの剪毛がはじまり、約1カ月つづけられた。ラクダの毛はつぎの3種類に分けた。

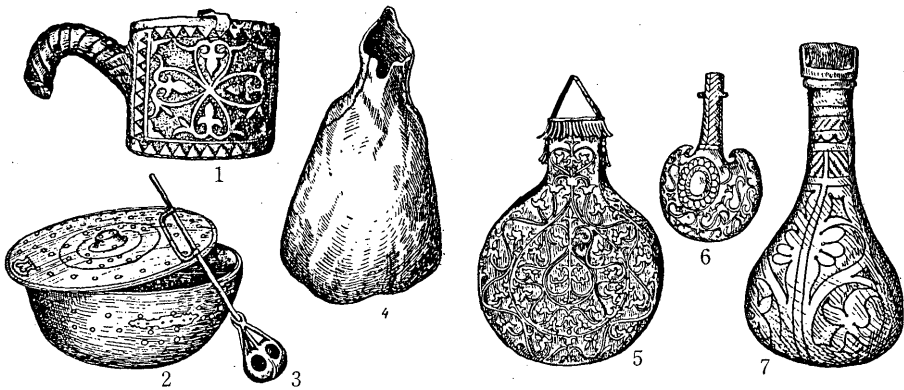
- 1) 頭の頂、首、肩の下、二こぶラクダのこぶからの長い毛(シュダ шу́да)。これは最も強い糸、ラシャ、袋物、投縄などの材料となるものである。
- 2) 背中と脇腹からの毛である(ジャバギ жабагы)。これは荷物をのせたりしたために、フェルトのようにつまっており、外套や毛皮の材料となった。
- 3) 以上の部分以外の毛(トゥエ・ジュン туге жун)で、ほとんど牧地に自然に落ちてしまうものである。カザフの人々はこれを集めて、袋物や長衣のためのラシャ、縄の材料にした [Толыбеков 1971: 548]。

バイたちはラクダと馬の毛を交易の対象にしていた。

[カザフ族の乳製品のあらまし]

春と夏の遊牧生活の特徴として、牧民たちがヒツジ、ヤギ、ラクダの乳製品を主食にしたことがあげられる。彼らはミルクを生^{なま}の形で決して利用しなかった。馬乳はクムイス кумы́з (馬乳酒) として、ラクダの乳はシュバト шүба́т (ラクダ乳酒) として飲んだ。その他主な乳製品はつぎの通り。

- 1) サピルマー・スー^т сапырма-су́т。



1) 雌馬の乳をしぼるための容器 (コネク көнек)
 2) クムイス (馬乳酒) のための碗 (テゲネ тегене)
 3) ひしゃく (オジャウ ожау)
 4) 皮袋 (スイレトペ суйретпе)
 5), 6), 7) 革製水筒 (トルスィク торсык)
 図4 カザフ族の伝統的な革製容器 (Дахшлейгер による)

新鮮な羊乳を火にかけ、それに少量のアイラン Айран を加え (バケツ1つにコップ半分), 大匙でかきまわし, ミルクが沸とうするまで焚きつづける。それから5分ほど火にかけたままにしてからおろす。その結果, いくらか濃いミルクができる。これはなかなかおいしいものである。

2) アイラン Айран。酸っぱいミルクと訳される。新鮮なヒツジや牛のミルクを約半分の量の水でうすめ, 沸かし, 冷やし, これに酸っぱいミルクを加える。その量は, バケツ1ぱいのミルクにコップ1ぱいほどである。それから釜を木蓋でおおい, その上から毛織の袋物またはフェルトをかけて, 5—6時間放置する [Толыбеков 1971: 549]。これでアイランはできあがるが, 別の資料では, 水でうすめるのは貧しい人だけで, シャラプ шалап とよばれ, ミルクだけの場合はアイランともカティク катык とよばれる [Толстов 1963: 426]。さらに

別の資料にはつぎのように書かれている。「ミルクは3—4時間発酵させて (заквашивать), ほとんど乳精 сыворо́тка (カザフ語で іріткі または сарсу) のないカティクが得られる。少しの時間放置するか, あるいはかきまぜると, それは薄くなって酸っぱくなる。これがアイランである。ウズベクとウイグルは, 発酵させたミルクはどんなものでもカティク катык, キルギスはチャラп чалап とよぶが, カザフは酸っぱいミルクと水を混ぜたものをシャラп шалап とよぶ」 [Дахшлейгер 1980: 117]。これで見ると, 著者によって3者ともいくらかちがっているようである。

3) カティク。トルイベコフによれば, これとアイランとの相違点は, アイランは水でうすめたミルクでつくるのにたいし, カティクは純粹ミルクでつくることにあるとのべている。また, カティクは主食であり得るが, アイランはあくまで飲物であるとのべている [Толыбеков

1971: 549]。

4) クルト күрт (酸っぱいチーズ) とサルィ・マイ сары май (バター)。トルィベコフによれば、これをつくる方法は同じである。バケツ4—5はいのカティクを皮袋に入れる。発酵がつづくように、これに毎日新しい羊乳を加える。これはイルキトとよばれるが、ほとんど1週間つづけられる。裕福な家族では5—10袋のイルキトを用意することもある。つづいて、イルキトの容量の10分の1ほどの冷水を加え、ふくらませて口をしぼり、フェルトを敷いた床の上を前後に、約2—3時間転がす。移動のときには、この皮袋をラクダに積み、長時間揺り動かした。それから皮袋を開いて浮いているバターをとり出し、残ったイルキトを大きな釜に移して沸かした。カザフ族には、満ちたりた生活を表現するのに、「犬の口からは脂肪が流れ、頭にはイルキトがふりかかる」(Аузынан ақ май ағып, ит басына іркіт төгіліп жатыр) という表現がある。イルキトをよくかきまぜながら、2—3時間かかって沸とうするようにする。火からおろして、夜の間に冷やす。朝、袋に移して液を滲出させると、チーズの塊(クルト күрт)が残る。これをクルミくらいの球にして、アシのむしろに3—4日干す。こうして固くなったものを、亜麻布の袋に入れてさらに乾燥させる。その結果、強い酸味をもった固い暗灰色のかたまりができあがる。これが遊牧民にとって、とりわけ冬期の重要な食糧となるクルトである。1かけらのクルトは、遊牧民が無人のステップに迷いこんだときでも、あるいは戦闘の場合でも、1日の食糧であった。カザフでは親友のことを、「クルトを分けあった友」と

いう。

トルコ共和国のユルックにおける「ホルト」は言葉の上では似ているが、少しちがうようである。クルトと同じ乳製品はチョケレクとよばれている[松原 1983a: 74]。

トルィベコフは、さらに2種類のクルトをあげている。1つはトラク・クルト торак күрт で、小さな球に分ける前に、つぶした食塩を加えたものである。これは白色で、酸っぱくて塩からく、熱湯によく解ける。もう1つはエージェイ・クルト ежегей күрт である。これは新鮮なチーズのかたまりに、干しぶどうほどに細かく刻んだイリムシク(後述)を加えたものである。これは黄いろみがかっており、甘酸っぱい味がする。乾燥した状態では両方とも同じように固い[Толыбеков 1971: 550]。

クルトについては、つぎのような記述もある。「10—15日間蓄積されたアイランからつくったクルトはアシチー・クルト ащы күрт (酸っぱいクルトの意) とよばれる。これは冬の間熱湯やスープに解かして使用する。シクパ・クルト сыкпа күрт は新鮮なアイランからつくる。これは茶といっしょに出される。コクチェタウ県では、酸っぱくないクルト(トゥシチー・クルト тұщы күрт)をつくる時には、ミルクを沸かしたとき少量の麦粉を加える。アシチー・クルトのときには麦粉は加えない。エージェイ・クルトは、新鮮なアイランに、塩気のないミルクを加える」[Дахшлейгер 1980: 118]。

羊乳からはスズベ сузбе とよばれるチーズの1種(ロシア語で брынза)をつくった。これのつくり方は簡単だった。

皮袋に入れた新鮮なチーズのもとに食塩を加え、毎日新しい羊乳をつぎたす。数日後にはスズベができてあがる。

主要な羊乳製品の1つにイリムシク *irimşik* とよばれる甘い乾燥チーズがある。これはお茶といっしょに食べたり、そのまま食べたりした。イリムシクのために、4月のはじめからマエク *маек* とよばれる凝固剤を用意する。マエクは仔ヒツジの胃袋に付着しているミルクのかたまりである。これは仔ヒツジの生後7—8日間だけ残っているが、その後草を食いはじめると散ってしまう。カザフの女性はこの胃袋の中に、子どもを生んだばかりのヒツジからコップ1—2はいのミルクをしぼって入れ、約1週間放置する。この間、胃袋の中にあつたものは発酵し、わりあい固いものになる。胃袋をそのまま別の皮袋に入れ、2—3日間、中味が乾燥しないように新鮮な羊乳を加える。これがイリムシクの凝固剤である。

しぼったばかりのミルクを釜に満たし、その中に上記のマエクを入れておく。するとミルクが固まってくる。そこでマエ

クをとり出して再び別の皮袋に入れ、釜に火を入れてミルクを沸かす。残った黄いろみがかつたものをむしろの上にとり出して天日に干す。これででき上りである。もう1つの方法もある。沸いている羊乳にコップ1ばいの酸っぱいミルクを加えて凝固させる。それからまた沸とうさせ、上記と同じプロセスを経てイリムシクを得る [ТОЛЫБЕКОВ 1971: 551]。

5月の初め頃、家畜の仔がかなり歩けるようになると、夏季の牧地への移動が始まった。カザリンスキー郡とペロフスキー郡の遊牧民はイルギズスキー郡とクスタナイト郡にある夏営地まで、直線距離で 300-400km 移動した。これをほぼ毎日 15 km、ふつう1カ月で目的地に着いた。この移動では、越冬に必要なものは春の牧地に土を掘って埋めておくので、わりあい身軽であった。食糧も多く携行する必要がなかった。

春の牧地から夏の牧地へ向かう遊牧キャラバンはお祭りのようであった。とりわけバイのキャラバンがそうであった。ふつうヒツジは足がおそいので、本隊よ

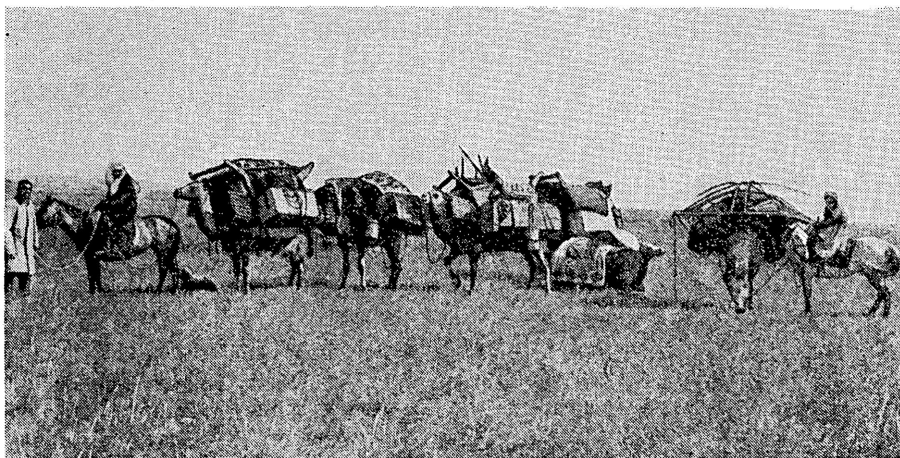


図5 カザフの夏営地への移動 (19世紀末) (Азиатская Россия による)



図6 カザフの夏のアウル(19世紀末)(Азиатская Россияによる)

りもかなり早く出発した。

「無人の広いステップに、荷物を積んだラクダが、前後につながれた長い列になってつづいている。先頭のラクダを引くのは、おそらくはアウルで最も美しい娘の乗馬姿であった。そのそばを、銀の帯とラッコの毛皮で縁どられる帽子をかぶった娘たちがだく足で馬を走らせている。馬の銀飾りが光っている。娘たちの前には、騎馬の若者たちが喊声をあげたり、歌をうたったりしながら進んでいる。彼らの中には、槍や刀を持っている者もみられる。その向こうには馬やヒツジの大群がつづいている。」

貧しい遊牧民の移動風景はちがっていた。「ギーギーときしむ数台の2輪車に生活用具を積んでいる。2輪車を引くのは馬または牛、まれにはラクダであった」[Дахшлейгер・1980: 73]。

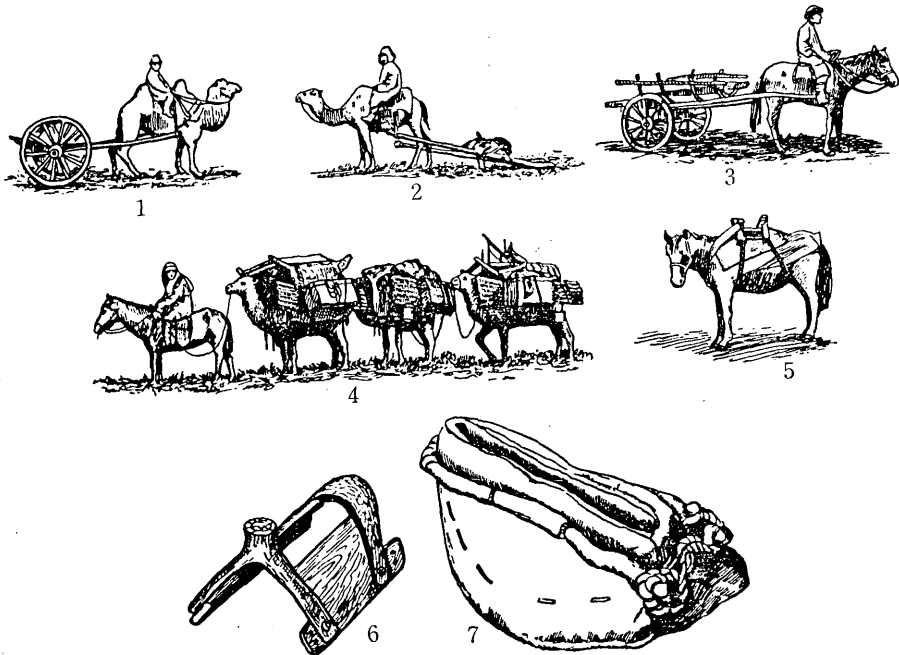
[夏営地における生活]

夏季の牧地にはふつう6月初め、少なくとも中旬には着いた。この牧地はふつう、ところどころ島のように砂地の散ら

ばる広いハネガヤのステップである。砂地の場所は定住農耕民の住地になっていた。そのため定住民の耕地や草刈場は避けなければならなかった。ときには定住民と協定を結んだ。遊牧民は着くとすぐに馬乳をしぼり、酒(クムイス)をつくった。

またこの時期に仔ヒツジの去勢が行なわれた。これは陰囊(ウマ ^{いんのう} ɯma)を切ったり、^{こうがん} 犖丸(エン ен)をつぶしたりすることなしに、精糸を切断する方法でなされた。左手で陰囊と犖丸をいっしょに引っぱり、右手の人さし指で精糸をさがしあて、皮膚の中にあるままで精糸を引きちぎるのである。この去勢法をタルティルー тартыру, この作業をする人のことをタルトクィシュ тартқыш とよんだ。この去勢法で家畜が死ぬことはまずなかった。

種用ヒツジの選択は一家の主人の仕事であった。毛が長く、体が大きく、尾の脂肪(クルジュク курдюк)の大きい雄が選ばれた。毛色は白、明るい灰色、赤茶色のものが好まれた。遊牧民の間では



1) 2輪車 (アルパ) 2) 曳いて運搬する道具 3) 2輪車 4) 遊牧のキャラバン 5) 荷駄用鞍をつけた馬 6) 荷駄用鞍 (アシャマイ) 7) ラクダの荷駄用鞍 (コム)

図7 カザフ族における輸送手段と荷駄用鞍 (Дахшлейгерによる)

白いフェルトが高く評価された。

6月末、仔ヒツジの第1回目の剪毛が行なわれた。その前の数日間、仔ヒツジを群といっしょに川または湖に追いこんで毛を洗った。これはコイ・トグイトウкой тогытуとよばれる。優秀な牧夫は、1カ月に少なくとも2回ヒツジを洗うようにつとめた。こうすると、ヒツジが皮膚病にかからず、毛がよくのびると考えられた。

富裕なバイの経営では、使用人と貧しい牧夫が毛を刈り、それでフェルトを作った。このときバイとその子どもたちは、結婚や葬式に関連する競馬や相撲などの行事を行なった。参加者には大きな賞金がかかり、また大量のヒツジやクムイス、

茶などが馳走された。バイの一家はきらびやかな晴着を着、飾りたてた馬を何頭も乗りまわした。夏の牧地は、生活の不安のない人々にとっては、休息と遊びの場所でもあった。

ヒツジとヤギの出産を3月末から4月初頭にもっていくためには、10月末から11月初旬に交尾させなければならない。そこで交尾が早すぎないように、7月はじめ種用オスの腹の下にクエク кукとよばれる四角なフェルト片を下げた。クエクは3,000—4,000頭のヒツジとヤギの群の場合75—100枚用意された。

この時期、ヒツジの群は主要なアウルからはなれて放牧された。牧夫たちは2—3張の黒くよごれた穴だらけのユルタ

に住んで、牧草を求めて移動し、また家畜に水を飲ませた。春から9月まで、放牧すればするほどヒツジによく脂がのるので、牧夫たちは夜はおそくまで、朝は日の出前からこれを放牧した。

ヒツジは、以前群が夜を過ごした場所にくると、牧草を食むことをやめ、昼間であってもすわりこんで反芻^{はんすう}をはじめる。この場合、経験のある牧夫はただちに場所を変えた。良好な牧草地では、早朝から放牧されたヒツジは、昼の11—12時頃ひと休みした。そのときは牧夫も、長い縄の一端を雄ヒツジに結びつけ、目ざまし時計の代わりに別の端末を自分の腕にまきつけて休んだ。

ヒツジが好調に体重をふやしているかどうかを知るうえで、前夜の糞の状態は1つの指標であった。牧草と水が充分であれば、ヒツジの糞は乾いた小さなクルミの実のようではなく、しめったかたまりに見えた。

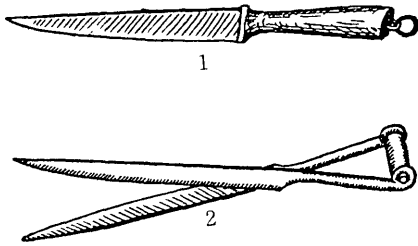
昼休の後、羊群は3—4時間草を食み、その後2—3時間宿营地付近の水場につれて行かれた。水飼の前にヒツジを休ませると、反芻をはじめ、水をあまり飲まなくなるので、牧夫はこれに注意した。また牧夫は、羊群を一見しただけで、ヒツジが喜んで牧草を食んでいるかどうかを知ることができた。牧草の状態がよいときには、ヒツジは遠くから見ると、「床にエンドウマメをばらまいたように見えた」[Толыбеков 1971: 561]。ほとんど動かない状態であった。こういうときには、牧夫たちは丘上に集まって、ときどき羊群を観察しながら、かぎタバコを口の中に入れたり、世間話を交したり、遊んだりした。カザフはタバコを吸わなかった。

牧夫たちは他人が羊群の中を横切ることを許さなかった。来訪者は口笛で自分の出現を知らせた。

水飼の後、ヒツジは2—3時間休んだ。この間牧夫とその家族は搾乳をしたり、1頭1頭について、体のどこかにダニがついていないか、あるいはこれによって腫物ができ、そこにウジがわいていないかを点検した。ダニに食われたあとにはキ・マイ **ки майы** (文字通りには糞の油の意) とよばれる薬をぬりつけた。これは馬糞を土中で燃やして得た油であった。腫物のあとにウジがわいているときには、鉋の片側のような道具でウジをとりごき、3—4日間つづけて同じくキ・マイをぬりこんだ。この手当の時期を失すれば、腐敗がはじまって家畜の全身に毒がまわり、ついに死んでしまう。そのため牧夫は5月からハエのなくなる9月まで、毎日ヒツジを点検した。ラクダにダニがついた場合も同じであった。ヒツジ、ヤギ、ラクダの疥癬^{かいせん}にたいしても同じ薬が用いられた。不注意で家畜が死んだときには、牧夫は主人であるバイによって罰せられた。

9月の初め、ヒツジの剪毛が行なわれた。この時期までに、群はバイの主要なアウルに帰ってきた。ヒツジの秋の剪毛(クゼム **күзем**) とフェルト作りは遊牧民の重要な仕事であった。この時期、バイは自分が先頭に立って仕事をすすめた。鉋のほか、ヒツジをしばって剪毛するために特別のユルタが用意された。また、フェルト作りに必要な湯を沸かすための薪も準備された。

剪毛には、労働能力のある人々全員があたり、バイの経営の場合には人手が多いので2—3日で終わった。フェルト作り



1) 馬とラクダの剪毛用のナイフ
2) ヒツジの剪毛用鋏

図8 剪毛用の道具

(ДахшлЕйгерによる)

にはおよそ2週間を要した。フェルトの作り方はつぎの通りであった。同じ色の羊毛を集めて、乾かした牛または馬の皮の上にならべ、10—15人が跪いた形でまわく座り、小枝でそれをたたく。すると毛はふさふさとやわらかくなる。それを、アシで編んだむしろに、適当な厚さに敷きならべる。この場合、表の方に白い毛をおくようにつとめる。

この上に熱湯をかけ、手のひらでおさえつけて、むしろごと巻きこんで転がす。つぎにそれを開いて重ね、また熱湯をかけて再びむしろに巻きこんで転がした。この作業は、フェルトが必要な固さになるまでつづけられた。できあがると、フェルトの縁を糸でかがり、4人で手でもんで柔らかくした後、ひろげて日に干した。ふつう、年齢のちがう25頭のヒツジの毛で、長さ約560cm、幅約180~200cm、重さ12—16kgのフェルトが得られた。20世紀初め、このくらいの大きさのフェルト1枚は、よく肥えた雄ヒツジ1頭と交換できた [Толыбеков 1971: 564]。

秋になると、遊牧民は冬の準備をはじめた。裕福なバイは特別な冬用ユルタを用意していた。白いフェルトの大きな夏用ユルタや移動に不向きな牛などは、夏

季の牧地に住む貧しい定住農耕民にあずけられた。この場合、牛のミルクの利用が定住民のために許された。

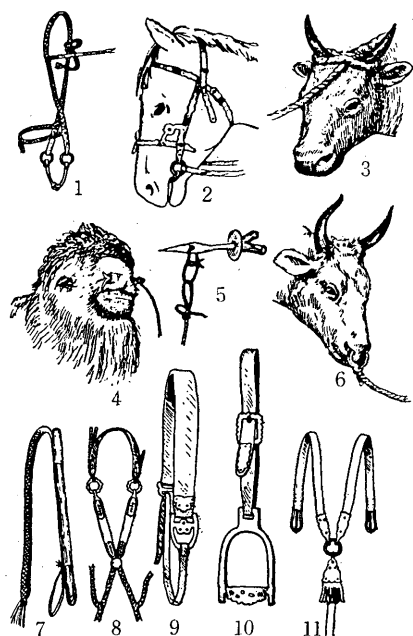
剪毛とフェルト作りをもって、夏季の牧地における遊牧民の生活は終わった。

[秋営地における生活と1年のサイクルの終結]

9月の後半、遊牧民たちは夏の牧地からの帰還をはじめた。秋季の遊牧もまた古くからの一定の方式によって行なわれた。はじめの数日間、家畜が夜間牧草を食んだり水を飲んだりしないで休めるように、午後から短距離を移動した。家畜は早朝放牧し、水飼をした。6—7日間たつと、ラクダなど役畜の腹部は締まり、全体としてスマートになってくる。これによって役畜は寒さや飢えに耐える能力を身につけてくる。1日の後半からはじまる移動はすべてウデレ・コシュー удере көшу とよばれる。

夏の牧地から最初に移動するのは、わりあい家畜数の少ないアウルである。バイの経営する大型のアウルは1—2週間おくれるのがふつうであった。

秋の移動はいくつかのアウルが大きなグループをつくって行なわれた。数百頭のラクダのキャラバンがつづき、それにヒツジや馬の群が途中牧草を食みながらつづいた。バイ一家の家財道具だけでラクダ50頭に達することがあった。キャラバンの先頭にたつのは、二こぶラクダに乗った晴着の娘または既婚の若い女性であった。この女性の乗るラクダは、こぶの高さに両側から長持をしぼりつけ、上からフェルトをかぶせたものであった。女性は中央の座席(コルジャラウ кор-шалау という)に風と寒さから守られて



- 1), 2) 面繫とくつわ (ジュゲン жүген)
 - 3) 雌牛のつなぎ具 (バスジバ бас жіп)
 - 4), 5) ラクダのつなぎ具
(ムルインディク мүрындык)
 - 6) 雄牛のつなぎ具 (ムルインディク)
 - 7) 鞭 (カムシ қамшы)
 - 8) 馬の尻繫 (クイイスカン күйыскан)
 - 9) 馬の腹帯
(アイイル・タルトパ аныл тартпа)
 - 10) あぶみ (ウゼンギ узенгі)
 - 11) 馬の胸革 (オミルディリク өмілдірік)
- 図9 家畜のつなぎ方と騎乗用具
(Дахшлейгер による)

座るのである。このフェルトは白い毛でつくられ、さまざまな文様で飾られた。

赤んぼうのいる女性も同じような座席に、ゆりかご (ベシク бесік) を長持にしばりつけて移動した。ときには、子どもを木の箱に入れて、コルシャラウに乗せた。この箱はケベジェ кебеже とよばれ、2人の子どものを乗せることも多かった。雨や雪が降ると、上からフェルトをおおった。

キャラバンの最後尾のラクダにユルタの骨組、古いフェルトに包まれた炊事道具、炉などが積まれた。このラクダはシャンラフチュエ шанрахтые (シャンラクを運ぶラクダ) とよばれ、ふつう最も柔順で強力なものが選ばれた。シャンラフチュエに乗るのは娘たちではなくて、バイまたは牧夫の妻であった。遠い昔は女奴隷がこれに乗った。

秋の移動の1日の距離はだいたい25-30kmであったが、ラクダはこのとき、最も重い荷物を運んだ。越冬用の食糧がすべて含まれたからである。ラクダ数の不足する貧しい牧夫一家の場合には、1頭あたりの荷物はもっと重かった。したがって、1頭あたりの荷物の軽いバイのキャラバンの方が遠距離を移動することができた。貧しいアウルが先に移動を開始するのは、この理由によるのである。春の牧地から夏の牧地への移動は1カ月かかったものが、帰路は2-3週間で行なわれた。

春の牧地は、基本的には秋の牧地 (クズデウ куздеу) と同じであった。アウルはここに2-3週間滞在し、ヒツジの交尾が行なわれた。またここで、春以来残してあった組立式家畜囲いの材料などを掘り出し、荷物はさらに増えた。夏の間、家畜がよい牧草地にめぐまれた場合には、生後6カ月半ないし7カ月のヒツジの交尾も順調に行なわれた。この場合、牧夫は主人から褒美をあたえられた。これはシャシュラトクィ шашратқы とよばれる。

11月には越冬用の肉と脂を用意するため、家畜の屠殺が行なわれた。この時期が過ぎると、家畜は瘦せはじめ、味も落ちるからである。馬、ヒツジ、ラクダ、

ヤギなど、すべてがこの屠殺の対象となった。豊かな一家は馬10頭、ラクダ2頭、ヒツジ30頭に達した。貧しい牧夫の場合は1—2頭のヒツジが限度で、1頭もつぶさないこともよくあった。ふつう、屠殺されたヒツジは皮ごと、焼いて保存された。他の家畜は皮を剥ぎ、最寄りの市場に売り出され、代わりに砂糖と茶が購入された。この頃、カザフの人々は相互に招きあって肉をご馳走になった。

遊牧民たちはふつう9月頃から、越冬能力のなさそうな家畜の屠殺をはじめた。老いた雌馬、欠陥のある弱いヒツジなどが始末された。なお、ここでカザフとモンゴルの食物のちがいについて一言しておきたい。すなわち、モンゴルは行き倒れの馬肉を食べるが、カザフはそれをしてないのである。

バイのアウルでは、屠殺にあたるのは貧しい牧夫の一家であった。彼らは皮を剥ぎ、内臓をとり出し、肉を塩づけにし、脂を煮出して固めた。また骨を煮て自家用の石けんをつくった。石けんづくりは女性の仕事とされた。

秋のシーズンが終るのは11月末であった。この時期、すでに雪が降りはじめ、水も氷った。猟の好きな人々は猟犬やタカを使ってキツネ、カモシカ、オオカミ、ウサギなどを狩った。バイのキャラバンは、例えば越冬用の屠殺が馬10頭、ラクダ2頭、ヒツジ30頭であれば、さらに積荷のためにラクダ15頭を加えた。バイの家族はオオカミの毛皮など高価な毛皮に身をつつんで、よく肥えた馬に乗ってキャラバンよりも先に出発した。猟犬やタカをつれて行くのは、冬の間猟を楽しむためであった。カザフの人々にとって猟は食糧を得るというよりは、専ら娯楽のため

であった。猟師が猟のとき、知人であろうとなかろうと他人に出会ったときには、自分の獲物をその人にゆずることになっていた。この風習はアン・バイラヌー *ан байлану* またはアンディ・バイラウ *анды байлау* とよばれた [Толыбеков 1971: 571]。

移動のときには、毎朝各アウルから1人ずつ騎馬の牧夫が集まってグループをつくり、キャラバンより先に出発してその晩の宿営地をさがした。遊牧民たちは老若を問わず場所の名前、宿営地や井戸の数と状態をよく知っていた。場所の名前は世代から世代へとうけつがれ、15歳の少年でも、夜間であっても、まちががなく指定された地点に達することができた。

秋の牧地から、最も遠くはなれたキジルクムの冬季牧地まで約20—25日を要した。冬は遊牧民にとって最もきびしい訓練の季節であった。子どもたちも幼時から大人を助けて仕事をした。燃料用の糞集めは子どもと老人の仕事であった。彼らは大部分読み書きを学ぶ余裕はなかったが、遊牧生活のさまざまな技能はすべて生活の中から会得したのである。

以上、カザフ族の遊牧生活のあらましを、主として四季による移動の側面から概観したが、トルィベコフによると、カザフの諸部族の中で最も遠距離を移動するアダイ *адай* 族の場合、年間少なくとも 2500 km に達するという。この間遊牧民は宿営のたびにラクダから荷物をおろし、ユルタを組立て、出発のときにはまたユルタを分解し、荷物をラクダに積む。これが年間 60—125 回くり返されるのである [Толыбеков 1971: 321]。つ

まり多いときには、1年を通じて平均3日に1日は移動することになり、これを人の一生になおすと、生涯の3分の1は旅の中にあることを意味している。

遊牧民は古くから定住農耕民を軽蔑した。とりわけカザフのバイなど有力な人々は、一時的に遊牧をやめた人々のことをジャタク *джатак* (横になっている人の意) などとよんで軽蔑した。サルт *сарт* という言葉も、遊牧のチュルク族の定住民にたいする蔑称に由来するとの説もある [Токарев 1958: 347]。遊牧民の親たちは、自分の子どもたちのことを怒って、「お前のような奴は、自分の糞尿の臭いでもかきながら、1カ所に止まったらいいよ」とどなることがあったという [Толыбеков 1971: 250]。

しかし、歴史的に見ると、遊牧は時代とともに衰退した。帝政ロシアによる北方からの圧迫によって牧草地は減少し、また天災や部族間の争いによって家畜を失い、定住化するものがしだいに増加した。20世紀初頭には、地域によってちがうが、定住民が15—83%に達した [Толыбеков 1971: 463]。カザフ族の研究者トルィベコフは、「定住への移行なしに遊牧社会の発展はない」と断言している。彼は遊牧と農耕を比較してつぎのように書いている。

「遊牧的牧畜の条件において、生産の開始期を家畜の交尾と考えれば、その終りはここからの成畜の獲得ということが出来る。ヒツジやヤギの場合、妊娠期間は5カ月である。これは変えることのできない自然の要素であって、中央アジアの遊牧民は年間1度の家畜の生産をむかえるだけである。定住した集約的経営においては、同じヒツジとヤギの母体から

2年に3度の出産を獲得できる。仔ヒツジを成畜にするために、おくれた遊牧的牧畜では約24カ月を要するのにたいし、定住の集約的牧畜では2—3倍早めることができる。馬やラクダの飼育の場合にはさらに長い期間を要する。妊娠期間は馬が11カ月、ラクダは12—13カ月である。雌雄の成畜を得るには5—6年かかる。このことは、遊牧の馬飼養で71—83カ月、ラクダ飼養の場合で73—85カ月を要することを意味している。一方、農耕の場合には、種まきから収穫まで(秋まきをのぞけば)6カ月を越えない」 [Толыбеков 1971: 318]。

こうしてトルィベコフは、遊牧が農耕に比べて生産力は劣るのにより多くの労働力を必要とすること、生産過程における自然条件への依存度が高いことを指摘している。したがって、農耕民に比べて余暇もなく、手工業や学習にたずさわる時間もほとんどないとのべ、定住へ移行することの必要性を力説している。

3. カザフ族遊牧民の家族生活

19世紀のカザフ族の社会では、両親と未成年の子どもからなる小家族が特徴的であった。ここでは、女性にたいする男性、年少者にたいする年長者の優位に基づく家父長制が支配していた。家族の長である男性の権威と、他の成員の従属的状态は、慣習法とイスラム法によって固定された [Толстов 1963: 432]。

[女性の地位]

慣習法としきたりはさまざまな形で女性の地位を低くし、また女性を社会から隔離した。タウケーハンの慣習法(ジェテ



図10 カザフのユルタの内部 (19世紀末) (Азиатская Россия による)

イ・ジャルグイ жеті жарғы) には女性の不平等な地位が明記されている。裁判での証人は、男性は1人でよい場合でも、女性は2人を必要とした。しかも現実には、女性は裁判で証人になることが全くできなかった。女性を殺した者の賠償額(クン кун)は、男性を殺した場合の半分であった。

夫は妻の財産を自由に処置することができた。夫の死後、未亡人は財産の権利をもってはいたが、しかし末子が成人するまでのことであった。この場合でも、彼女は単なる後見人にすぎなかった。未亡人が再婚した場合には、財産の6分の1ないし8分の1が分与された。ただしこれも場合によってちがっていた。

こうした不平等にもかかわらず、女性は早朝から暗くなるまで、生活のさまざまな負担を背負った。遊牧または半遊牧

の生活では、女性は移動のとき、ラクダに生活用具を積んだり、ユルタを解体・組立てたり、1日に数回搾乳し、家畜に水を飲ませ、家族のために食事をつくり、家族の衣服の面倒を見なければならなかった。「アウルの移動のとき、家族の長である父親の役割は受動的なものであった。ヒツジを追い、馬群を観察するのは妻と子どもたちであった」[ЗЕЛАНД 1915: 328]。

春と秋、女性は夫を助けてヒツジの剪毛に従事した。そのほか、ラクダの毛を集め、燃料として家畜の糞をひろい集めた。フェルトづくり、糸つむぎ、機織りも女性の仕事であった。刺繍やアプリケは勿論であった。

カザフの女性は社会的には無権利であったが、家庭内での比重は大きかった。遊牧民にたいするイスラム教の影響が弱



図11 カザフの機織り (19世紀末) (Азиатская Россия による)

く、遊牧生活における女性労働の役割が大きい
ため、オアシスにおけるイスラム教の農耕民に比べて、ずっと解放されて

いた。とりわけ貧しい家庭での女性の地位は高かった。

家庭内における女性の地位は、彼女の



図12 カザフのフェルトづくり (19世紀末) (Азиатская Россия による)

年齢、家族の他の成員との相互関係によって、大きなちがいがみられた。

カザフの娘は既婚女性よりずっと自由であった。富裕な家庭では、娘は家事労働に加わらなかった。最も負担が大きく、しかも無権利だったのは、夫の家族における若い嫁、とりわけ子どもを生む前の嫁であった。彼女は夫の父親、夫、夫の兄弟を名前では呼ぶことは許されず、また夫の父親とは直接会って話すこともできなかった。女性は子どもを生むといくらか立場が楽になり、成人した息子のいる年配の女性は家庭内で大きな発言力を持っていた。

夫の家庭における妻の役割と地位は、彼女の出身によっても大きく左右された。実家が富裕で有力な家庭であれば、その一族の支持によって、婚家での彼女の立場はかなり自由であった。

カザフの家族における家父長制的性格は、家長と子どもたちとの関係にも現れていた。子どもたちは一切父親の意志に反することはできず、父親と裁判で争うことは絶対に許されなかった。一方父親は、自分の幼い子どもを殺した場合でも、ビーの裁判において罰せられなかった。離婚になれば、子どもは必ず父親のもとに残った。

父親は成年、未成年を問わず、自分といっしょに住む子どもたちの財産を自由に処分することができた。家長は息子が15歳になれば分家させることができたが、そのとき息子に分与した財産はもはや父親の管理の範囲外とされた。

遺言による相続は認められなかった。家長の死後、遺言はすべて分家していない末子の所有となった。また、親族であろうと他人であろうと、子どもを養子に

迎えることができた。養子にするためには証人があればよかった。養子は遺産相続において実子と同じ権利を持っていた。19世紀後半、ロシアの影響によって、婚姻や相続の慣習法がいくらか制限されるようになり、例えばレヴィレート婚の風習なども以前はどきびしくは遂行されなくなった [Толстов 1963: 433]。

[結婚]

カザフ族の社会では3親等以内の親族と婚姻関係に入ることは許されなかった。また男性の系統で4親等から7親等にあたる人々との結婚は非難された。女性の系統であれば、2親等でもよかった。

カザフ族にはレヴィレート婚の風習があり、未亡人は原則として亡夫の兄弟その他の親族と結婚しなければならなかった。またソロレート婚の風習によって、妻に死別された男性は、亡妻の未婚の姉妹があれば、その女性と結婚することになっていた。こうした風習のために、夫婦間の年齢差の著しい場合が少なくなかった。またイスラム教によって一夫多妻も許されたが、ほとんどバイなど富裕な層に限られていた。

結婚の年齢は15—16歳とされていたが、女性の場合には13歳以下である場合も稀ではなかった。したがって、男女とも性的に成熟する前に結婚することが珍しくなかった。

1926年カザフのアウルで129人の女性を調査したバラノフとクジミナは、つぎのような結果を報告している。12—14歳で結婚した女性が18人、15—18歳が87人、19—20歳が21人、23歳と25歳が各1人となっており、当時のカザフ女性の性的成熟は18—20歳であった。ところがこの年

齢までに全女性の90%以上がすでに結婚しており、うち50%は子どもを持っていた[БАРАНОВ И КУЗЬМИНА 1930: 85]。

結婚に必要な条件は、婿の家族から嫁の実父への婚資(カルィン қалың)の支払いであった。婚資(ロシア語文献ではふつうカルィム қалым)はふつう家畜で支払われたが、その額は両家の身分や財産によってちがっていた。

カザフにおいても、乳幼児のときに婚約する風習が広まっていた。これはカザフ語でジャスタイ・クダラスー жастай күдаласу とよばれた。家父長制的家族では、親たちによる幼児の婚約は新しい意味をもっていた。すなわち富裕で名門の家族は、これによって有力な親族を得、ステップにおける影響力を強めるためであった。

婚資の支払いによって婚礼の方式と時期が決定された。婚資は一般にかなり高額であって、これを1度に全額支払えるのは富裕な家族だけで、あまり豊かでない家族は早目に婚約をして、何回かに分けて婚資を支払うことをのぞんだ。

貧しい家族は、息子のために婚資を支払ってやることができず、富裕な親族の助けを得、そのため永年にわたって債務に苦しめられることも少なくなかった。貧しくて結婚できない男も稀ではなかった。しかし19世紀末から20世紀初頭における急速な階層分化によって、相対的に零落した人々が多くなり、婚資なしの結婚も行なわれるようになった。

婚約の前に仲人をたてて婚資の額などを定められるが、この仲人選びも大きな仕事であった。誰もができるだけ有力な、自分に都合のよい人をつとめるのぞんだからである。仲人はまず、婿の側から嫁の父親に

最初の贈物(カルグィ・バウ қаргы бау)を持参し、婚資の額と支払方法を定めた。話がまとまれば支払いが開始されるが、これと同時に娘の父親は持参品(ジャサウ жасау)の準備にとりかかった。その額は婿側との話し合いによったり、あるいは娘の父親の意志と財産によったりした。嫁が豊かな家庭である場合は、多数の衣服、寝具、容器、家畜のほか、新しい白いユルタ(オタウ отау)が用意された。貧しい家庭の娘はわずかな衣服、容器、寝具だけであった。

結婚当事者の若者たちは、婚礼の準備には加わらなかった。彼らは、婚礼の日まで互いに見たこともないことさえ稀ではなかった。彼らにとって両親の意志はすべてであった。婚資の支払いが終ると、婿は「ひそかに」花嫁を訪れることができた。

婚礼の日をいつにするかは、双方で話し合うか、あるいは婿の父親が定めて嫁の側に知らせるかした。式の当日は婿が花嫁のアウルを訪れ、そこでムラーによって結婚の儀礼がとり行なわれた。このとき3人の証人が必要であった。

披露宴(Той той)はまず花嫁のアウルで行なわれ、花嫁のすばらしい資質や能力をほめたたえ、幸せな生活への願望をこめた歌が多く歌われた。豊かな家庭の場合は競馬(バイガ)やヤギの奪い合い(コクパル көкпар)、レスリング(クレス күрес)などが行なわれた。競馬には耐久力を競うもの(アラマン・バイガ аламан байга)とふつうのものがあった。前者は距離100 kmに達したが、後者は5-10 kmであった。いずれの場合も障害物の多い場所が選ばれた。こうした競馬は有力な主催者によって、婚礼、

誕生、葬礼、追悼などのとき開催されたが、勝者には賞金があたえられた。1860年、アタバサルスキー郡の有力なバイの追悼供養では、賞金として馬372頭、優勝者には100頭があたえられた [Баранов и Кузьмина 1930: 444]。コクパルは中央アジア全域に広まっている競技で、アフガニスタンではブズカシュとよばれているものである。

さて、婚礼の宴が終ると、花嫁は故郷のアウル(コシュタスー коштасу)と別れ、婿と多くの親族にともなわれて婿のアウルに向かった。アウルに着くと、「顔見せ」(ベト・アシャル бет ашар)とよばれる歌で迎えられ、婿の両親や親族に紹介された。このとき、誰か若い人の手で花嫁の顔のおおいがとりのぞかれた。

婚礼のときには、花婿花嫁の親族はみな贈物を持参することになっていた。花嫁が実家の炉と別れるとき、故郷のアウルと別れるとき、婿のユルタの炉に近づくとき、それぞれ儀礼が行なわれた。その他婚礼では、婿が花嫁をつれ去るとき、それを花嫁の親族が妨害したり、婿が嫁の両親、嫁が婿の両親に会うことを避けたりすることなど、多くのしきたりがあった。

また婚礼では、新婚のふたりに甘い物をふりかけたり、ふたりに1つの碗で水を飲ませたりした。貧しい人々の場合には、言うまでもなく、すべては簡単質素であった。

【誕生】

ルデンコは1930年頃、北東部カザフスタンのナイマン部族の生活について報告している [Руденко 1930: 1-73]。これによると、カザフの女性は月経のとき

不浄とされ、この期間潔斎は行なわれなかった。女性はこの期間にもあらゆる仕事に従事しながら、祈禱をしなくてもよいとされた。たいへん稀ではあるが、墮胎もあることはあった。そのために女性はなにかの草(ルデンコも調査できなかった)を煎じたものに水銀を混ぜて飲んだ。またときには穴を掘って、そこに焼石を投げこみ、毛皮外套をかぶってその上にしゃがんだ。焼石には水銀を投げ入れ、その水銀の水蒸気で墮胎できると考えられた。

カザフの女性は、跪いて、ユルタの壁に張った縄につかまって出産した。このとき産婆(キンディク・シェシェ кіндик шеше)または経験のある女性が赤んぼうをとり上げた。安産のときには、出産を助けた女性たちはみな贈物をもらい、豊かな家庭では特別に屠殺されたヒツジをご馳走された。女性たちは塩を混ぜたバターを赤んぼうの体にぬり、揺籃に入れるのは3日目であった [Руденко 1930: 49]。別の資料では産後5-7日となっている [Толстов 1963: 436]。

生まれた日の夕方、アウルじゅうの若い男女が新生児のユルタを訪れ、朝方までにぎやかに騒いだ。主人は来客にご馳走した。この風習(シルデカナ шілдекана)は、生後最初の夜に訪れるとされる悪霊(ペリ пері)を警戒するためであった。悪霊は新生児を盗んで、別の、身体の不自由な赤んぼうと交換するかも知れないと考えられた。夜が明けると、主人はみんなに小さな贈物をした。

新生児を揺籃に入れるときも宴会(ベシク・トイ Бесік той)が行なわれ、来客は手みやげを持って参集した。来客の中には馬装具や鞭、フクロウの羽根を持

参するものもあった。この羽根を子どもの帽子につけると、魔除けになると信じられた。ご馳走の後、アウルで尊敬されている子どもの多い老女によって新生児に名前がつけられ、揺籃へ運ばれた。両親はこの女性にも贈物をした（ベシク・サラル Бесік салар）。これはふつうワンピース用またはかぶりもの用の布地であった。アウルにイスラム教の影響が強くなってからは、ムラーが子どもの名をつけた [Толстов 1963: 436]。

母胎から9カ月以内に生まれた赤んぼうは未熟児とされ、40戸のユルタからミルクを集めて赤んぼうの口にくめた。それからユルタの壁の格子に揺籃をつり下げた。場所によっては、赤んぼうが男女どちらであっても、父親または祖父の帽子をかぶせた。赤んぼうの誕生について、最初にアウルじゅうを馬でふれまわった若者は褒美をもらうのがつねであった。

カザフの揺籃には、中央アジアの諸民族の場合と同じように、赤んぼうの小便をうけるための穴があげられている。子どもの欲しい男は、新生児の揺籃の穴から干し果物を落してそれを食べた [Руденко 1930: 50]。女の子の場合には、無事に育つことを願って、あるいはつぎは男の子が欲しいという願望をこめて、男の子の着物を着せることがあった。

生後40日（кыркынан шыгару）には、親族や近くの人々を招いて宴会を開いた。この日、有力な家庭では、いろいろな競技が行なわれた。男の子が3歳から10歳になると、イスラム教徒の風習にしたがって割礼が行なわれ、両親の財産に応じて、宴会や催物が行なわれた。

[葬礼]

18—19世紀のカザフの葬礼には、イスラム教の風習とイスラム以前の信仰の名残りが混じっていた。

カザフとほとんど同じ風習のキルギスでは、死者の寝ていた建物からすべての道具と食糧が運び出されていた。これは人が死ぬとき、動物と同じように体を切られて血を流し、その血で品物がよごされると考えたからである [Баялиева 1972: 66]。また息を引きとった後、遺骸は埋葬まで必ず別のユルタに移された。そして死者は、生者とは反対に、入口に頭を向けて安置された。生者は入口に頭を向けることはなかった。死者にたいしては、多くのことが生者と反対になるように行なわれた。このことは日本の場合でも同じである。

キルギスでは、同族の人がどこで死んでも、必ず同族の墓地まで運ばれて埋葬された。運ぶ途中、遺体が腐敗すれば、骨だけが運ばれた。カザフ族のナイマン部族の場合には、死者が同族の墓地から3日行程以内の地で死んだときだけ、遺体は橇やラクダ、馬で運ばれた [Руденко 1930: 50]。

死者が別のユルタに運ばれると、埋葬の日の朝2—3人の手で体をふく儀礼が行なわれ、サワン（カザフ語でケビンкебін）とよばれる白布を死者の体に巻きつけた。これは女性で15—18 m、男性で10 mを要した。その上からじゅうたんまたはフェルトを巻いた。ムラーが祈禱をした後、死んだ当日、または翌日墓地に運んだ。女性たちは大声をあげて泣きながら死者を惜しむ言葉を口にし、死者が豊かなバイなどであれば、特別の泣き女がやとわれた。泣き女はユルタの壁面のフェルト

を持ち上げて、泣き声や死者をたたえる言葉が外によくきこえるようにした。

墓場に死者を運ぶのは男たちだけで、近い親族が交代で死者をのせた担架をかついだ。墓穴はカタコンブ式のものが多かった。死者は頭を北に、顔を西（メッカの方角）に向けて葬られた。

未亡人は死後3日（ウシ үши），7日（ジェテシ жетісі），40日（キルクイ кыркы）に行なわれる追悼のときには顔を引っかいて傷つけ、また1年の間服喪のしるしとして黒い布を頭にかぶり、毎日3回死者のために祈った。また3日，7日，40日の追悼のたびに親族が集まり、ご馳走がふるまわれた。このため貧しい人々にとってその負担はたいへん大きかった。未亡人はまた、遊牧の移動のときにも、他のアウルに出会おうと大声で泣いた。すると人々は未亡人の涙をふいてやり、冷たいアイランなどをご馳走した。

死者の追悼は1年忌（ジルィ жылы）までが義務的で、親族を招いて盛大に行なわれたが、その後の毎年の追悼（アスac）は必ずしも大々的にする必要はなかった。1年忌では多額の賞金をつけた競馬が催されることも多かった。ときには行事が3—4日にわたることもあった。

ルデenkoは1927年9月21日—23日、イルティシュ川上流部のクゼウ・クムというところで、その年の3月に死んだカザフのジャンガバイ・ブィテバエフのために行なわれた追悼について報告している。アスはふつう9月に開催された。

このアスでは、来客のために15張のユルタが用意された。招かれたのは4つの郷（ヴォロスチ）の人々で、ご馳走として馬4頭、牛6頭、ヒツジ25頭が用意された。来客はみな2—3個の皮袋にクム

イスをつめて持参した。彼らはアウルに到着するとまず未亡人のユルタを訪れて挨拶した。また来客のつれてきたヒツジが30頭あったので、屠殺されたヒツジは全部で55頭に達した。ただし、このアスでは革命前におけるような賞金つきの競技は行なわれなかった。これは地方の行政当局から禁止されたのである。

ルデenkoはここで、1896年に行なわれた大アスについての話もきいた。そのときは来客用のユルタが300張、各ユルタに馬1頭、ヒツジ1頭、給仕人1名のわりあいを用意された。競馬は約30kmの距離で250頭が参加して行なわれ、25位まで賞があたえられたが、優勝馬には馬100頭があたえられたという [Руденко 1930: 56]。

十月社会主義革命の後、カザフ族のアウルは、社会的、家族的に根本的に変った。男女は同権として扱われ、女性の意志を無視した結婚の強制、一夫多妻、未成年者との結婚などが1924年の法律で禁止された。また母親と子どもの保護のための多くの方策が実施された。現在のカザフ共和国の首都アルマ・アタを旅行すると、高等教育を受けた多くのカザフ女性が各種の教育施設や研究所で活躍しているのを目にすることができる。

4. カザフ族のユルタ

[ユルタ]

ユルタという言葉は、もと氏族の所領とか場所を意味するチュルク語のユルト юрт に、ロシア語の女性名詞の語尾である「а」が加わったものとされ、遊牧民の天幕の意味に用いられている [Шипова

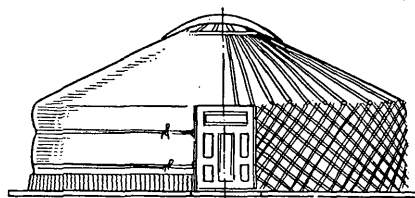
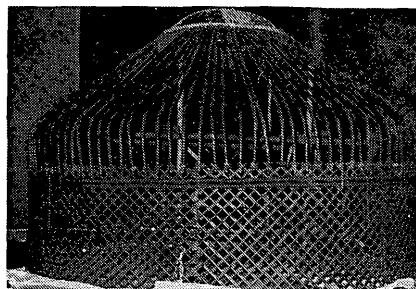
1976: 431]。

ユルタはユーラシア中央部のステップの遊牧民に広く分布している。「格子状ユルタの分布の地理的範囲はユーラシア大陸に限定され、その境界は大陸中央部の森林のないステップおよび半砂漠地帯における遊牧生活の境界と正確に一致している」[Куфтин 1926: 31]。

ユルタはカザフ、キルギス、トルクメン、カラカルパク、カチン、モンゴル、カルムイク、ブリヤートにみられ、ユルタの名残りは定住のバシキール、ノガイ、ウズベキスタンのサルトにみられ、後代の借用としてアルタイ地方の一部のチュルク族にも入っている。名称はモンゴル語でゲル гер、カザフ語でキーズ・ウイ киіз уй、キルギス語でウイ уй またはカラ・ウイ кара уй、ボズ・ウイ боз уй、トルクメン語でガラ・オイ гара өй またはオイ өй である。中国文献では古くパオ（包）とよばれたが、最近では「毡房」[国家民委民族問題五种双書編輯委員会『中国少数民族』編写組 1981: 195]と称している。

ユルタは紀元1千年紀の中頃、チュルク族によって発明されたといわれる。チュルク族以前のユーラシアの遊牧民であるスキタイ、サカ、サルマタイらはユルタを知らなかった。彼らは円錐形に組んだ丸太の上にフェルトをかぶせたもの（チュム чум）、あるいは2輪ないし4輪の車輪上につくった住車を利用していた[Еремеев 1980: 14]。

ユルタは現在、天井部分が円錐型になったものと、球型になったものとの2種類がある。モンゴルのユルタは円錐型に属し、カザフのものは球型に属する。前者は、天井用小丸太が真っ直ぐな棒である



上、天井が球型のもの。
民博のカザフのユルタ。

下、天井が円錐形のもの。
モンゴルのユルタ。

図13 ユルタの2つのタイプ
(Майдар и Пюрвеев による)

のにたいし、後者は天井用小丸太の下端がまるくなっており、これによって天井が高くなっている。クフティンは、この球型が移動式住居の最高の発展形態であろうと考えている [Куфтин 1926: 32]。

民博のカザフ族のユルタは、ソ連科学アカデミー民族学研究所（レニングラード支部）のカザフ族専攻の民族学者クリレフ Вадим Петрович Крылев によって、1976年、カザフ族の小ジューズに属するアダイ族のルザエフ Рузаев 家の好意によって、民博のために購入されたものである。これはルザエフ家の夏季用セカンドハウスとして用いられていた。アダイ族はカスピ海の東岸、マンガシユラク半島一帯に住んでおり、カザフ族の中でも比較的小そくまで遊牧文化の面影を強く残していた。

このユルタの各部分はすべて伝統的技

法によった手づくりである。さまざまな刺繍も、ルザエフ家の祖母ひとりの手で、1930年頃から20年あまりにわたって行なわれたものである。

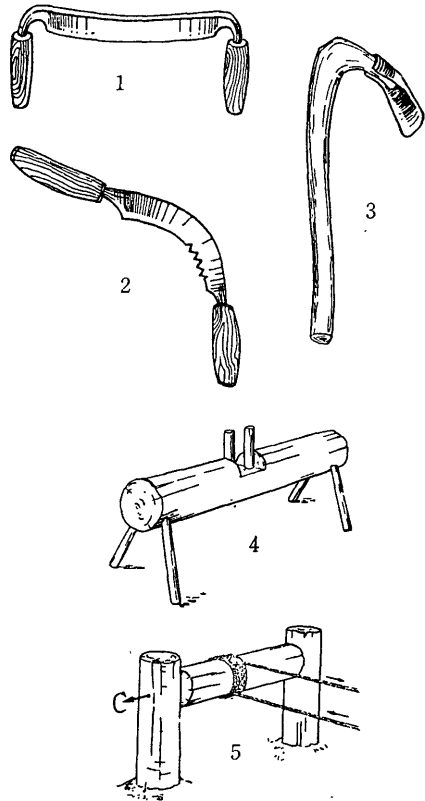
ユルタは今でも、定住化したカザフ共和国の人々の牧畜生活に広く利用されている。ただし、手づくりのものは今ではほとんどなく、ほとんど工場製になっている。例えば現在、ウシュトベ Уштобе市のユルタ工場では、1975年当時、年間1万6,000のユルタを生産した。この場合、ユルタの骨組は、一時松が用いられたが、しだいに合板に変わり、このため耐久年限も著しく増したという [МУКАНОВ 1981: 12]。ただしフェルトのおおいは、防湿、保温、通風などの点で羊毛に代わるものではなく、今でも昔ながらの羊毛フェルトが用いられている。

民博のユルタは、カザフ族のものは手づくりであるが、その隣にあるモンゴルのユルタ（標本番号 H63847）はウランバートルの工場製である。

【カザフ族のユルタの構造】

カザフのユルタは基本的には木製の骨組とそれをおおうフェルトからなっている。そして骨組は4つの部分に分けられる。

- 1) ケレゲ кереге。これはモンゴル語のハナ хана に相当し、壁面を構成する伸縮自在の格子からなっている。
- 2) ウィク уык。これはモンゴル語のウニ унь にあたり、天井の丸太である。言わばコウモリ傘の「矢」の部分である。
- 3) シャンラク шанрак。丸天井のまわりの窓である。モンゴル語ではトーノ тооно (またはツァグリュク цагрук) である。



- 1) ヤナギ材の樹皮をはぐためのけずり具
- 2) スイズギシュ
- 3) シャップ・ショット
- 4) テズ
- 5) ウスキ

図14 カザフのユルタの骨組を作るための道具 (МУКАНОВ による)。

- 4) エシк есік。開閉できる入口の木扉のことで、モンゴル語ではハールガ хаалга とよばれる。

ユルタの木製部分にはヤナギ、シラカバ、ポプラなどの木が用いられるが、最も望ましいのは古くからヤナギ (民衆の間ではタル тал とよばれる) とされている。これは曲げやすいことがなよりの特徴である。ポプラは以前ユルタの頂部、つまりシャンラク部分に利用されたが、

やはりヤナギおよびシラカバの方が好まれている。

木製部分の加工は図14のような道具を用いて行なわれる。まず、けずり具で樹皮をむき、3) のチョウナ (シャッパ・シヨト шаппа шот) で木材の端末を切りとる。また天井用小丸太の加工には図14の2) のような道具 (スィズギシュ сызгыш) が用いられる。これの右側は鋸歯状になっていて, уык の端末にギザギザをつけるのに用いられる。以上の材料は皮をむいた後にまず乾かされる。

かつて, ユルタを作る職場には小丸太を火にあぶるための火床 (モル мор), 曲げるための台 (テズ тез), 穴をあけるための錐 (ウスキ уски) などがあったが, 今では錐としては電気ドリルが用いられている。

壁面用の格子 (カナト канат) はふつう6枚からなっているが, 民博にあるユルタはカナトが7枚である。つまりユルタのケレゲは多くの場合6—8枚のカナトによって構成されており, 1枚のカナトはふつう15個の二股 (バス бас) からなりたっている。したがって, 6枚カナトの天幕の場合は, 90個のバスをもっている。カザフ族の間では「90個のバスをもつケレゲに80本のウイクをのせる」という表現がある [МУКАНОВ 1981: 26]。このことは, ウイクは正確にバスの数に合わせるのではなくて, 若干間隔をあけることを意味している。この方がよく強風に耐えるとされている。民博のユルタでは, ウイク120本, ケレゲのバス114個である。6本のウイクは扉枠の上になることになる。

ケレゲまたはカナトはサガナク сағанак とよばれる小丸太からできているが,

このサガナクは長いのが20本 (左側10本, 右側10本, 民博のユルタでは各7本ずつ) で, 長さはふつう 210–260 cm である。民博のユルタでは最長が 225 cm である。残りのサガナクは, カナトの両端に近くにつれて短くなっている。サガナクは外側にまるくふくらみがつけられているが, これはケレゲに結びつけられるウイクを強化する役割を果たしている。

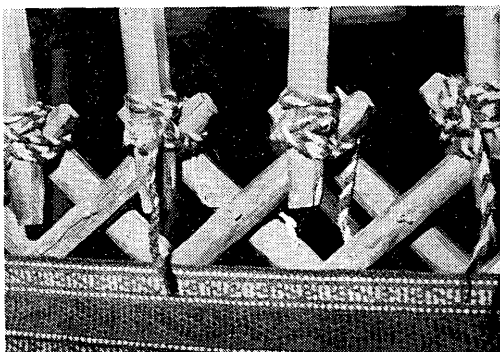
カナトを形成するサガナクには, 左右が交叉する部分に革紐を通すための穴があけられている。この締め方はコクテウ көктеу とよばれ, 革紐そのものはコク көк とよばれる。コクはラクダ, 雄牛または馬の革でつくられている。民博のユルタではラクダの革である。コクテウは, 革の一方の端末に穴をあけ, それに一端をさしこんで強くひっぱる方法である。各カナトのバスの数は15個がふつうである。

天井用小丸太, つまりウイクの長さ太さはカナトの数に応じて変化する。カナトの枚数の多いほど, つまりユルタの規模の大きいほど, ウイクは長く, また太くなる。6枚カナトの場合, ふつうウイクの長さは 240–250 cm で, 民博の場合は 320 cm である。ウイクの基部 (全長の約3分の1), つまりケレゲにつながる部分は, わずかに曲げられている。ウイクは自然木の太さに応じて先端にゆくほど細くなり, 端末はシャンラクの穴にさしこむために尖っている。このさしこみ部分はコズ көз とよばれる。

シャンラクはまるい外縁部と, それを強化するための棒 (クルディレウイシュ кулдіреуіш) からできている。これも基本原理はモンゴルのゲルにおけるトーノと同じであるが, 構造は少しちがって



1



2

図15-1 カナトとカナトの接合部分（民博のカザフのユルタ）
図15-2 ケレゲとウイクの接合部分（ $\diagup$ $\diagdown$ ）
サガナクの交叉点にコクが見える。

いる。6枚カナトのシャンラクの直径はふつう 135-140 cm である。民博のユルタはわりあい大きくて 200 cm である。シャンラクの外縁部は2個の半円部分でつくられ、接統部は鉄の棒で固定されている。

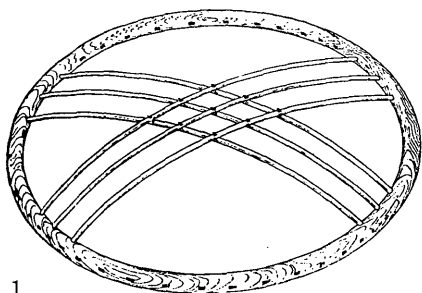
民博のシャンラクの材料はシラカバである。外縁部の木材の直径は 10 cm 以上で（民博の場合は 13 cm），そのくらいの太さのシラカバ立木をある期間押し曲げてつくる。全体としてシャンラク作りはユルタの骨組の中で最も手間のかかる仕事で、言わばユルタの「心臓部」である。シャンラク用のシラカバは樹液の多い夏の間に切りとり、乾燥させる前に最終的に曲げて固定する。シャンラクにはウイクとクルディレウイシュの先端をさしこむための四角形の穴がウイクの数だけつくられる。

クルディレウイシュはふつう 3 本ずつ直角に交叉されている（民博の場合は 9 本ずつ、計 18 本）。また上方へ球状にまるくふくらんでいる。交叉点は同じく皮紐

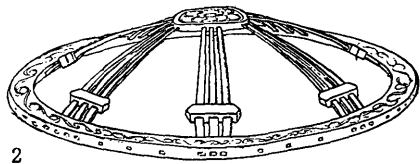
көк で固定され、ユルタを組立てるとき、棹でシャンラクを高く持ちあげるときの支点の役割を果たす。

かつてシャンラクは、カザフの人々にとって、家族繁栄のシンボルとして大切にされた。それは世代から世代にうけつがれ、家族を保護する祖霊の宿るものと考えられた。中央アジアを旅行すると、カザフ、キルギス、トルクメンなどの現代風の住居に、シャンラクだけが保存されているのを見かけることがある。

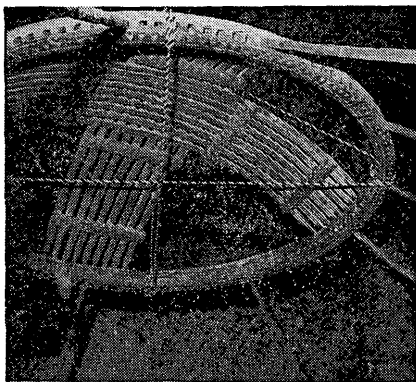
革命前のカザフ族では、息子たちが結婚すると、親は若干の家畜とユルタをあたえて独立させた。この分前のことをエンシ енши という。こうした息子たちは独立したシャンラクの主人と考えられた。父親とともに残るのは末子（кенже кенже）であって、父親の遺産だけでなく、そのユルタをも受けついだ。そのため末子はシャンラク・イエシ шанрак иеси、つまりシャンラクの主人とよばれた [Муканов 1981: 29]。末子是这样して、兄たちよりも遺産は少なくとも、



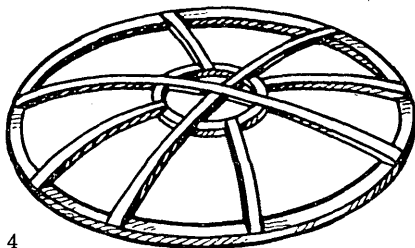
1



2



3



4

- 1, 2 東部カザフスタンのもの。
(МУКАНОВ による)
- 3 西部カザフスタンのアダイ族のもの。
民博のユルタ。
- 4 モンゴルのトーノ ТООНО。
(МАЙДАР による)

図16 シャンラクのタイプ

家を継いだものとして一族から重んぜられた。

シャンラクは古ければ古いほど、コラ・シャンラク *кора шанрак* として尊重された。シャンラクの中には文様の彫りこまれたものも少なくない。文様にはヒツジの角を表すもの、さまざまな植物を表すものなどがある。また銀の薄板を張りつけたもの、金属を象がんとしたものもある。

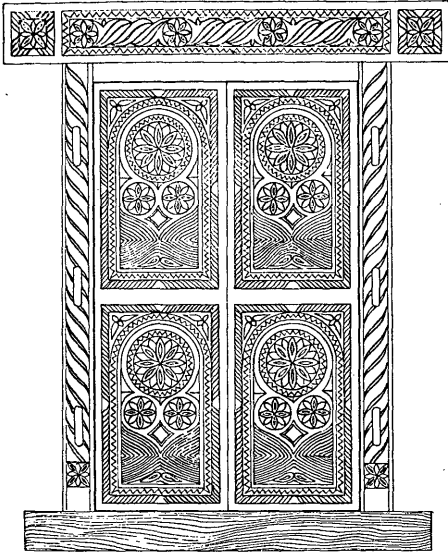
ケレゲ、ウイク、シャンラクの部分は、現地でトマル・ボヤウ *томар-бояу* とよばれる草の根によって黄いろく彩色された。染料は根を煮つめることによって得られた。しかし20世紀初頭カザフ草原にアニリン染料が出現して、天然の染料はしだいに用いられなくなった。

ユルタの入口は木枠と観音開きの木扉(2枚)と、その上から下げるフェルトのカバーからなっている。フェルトのカバーは文様つきのござで裏打ちされている。

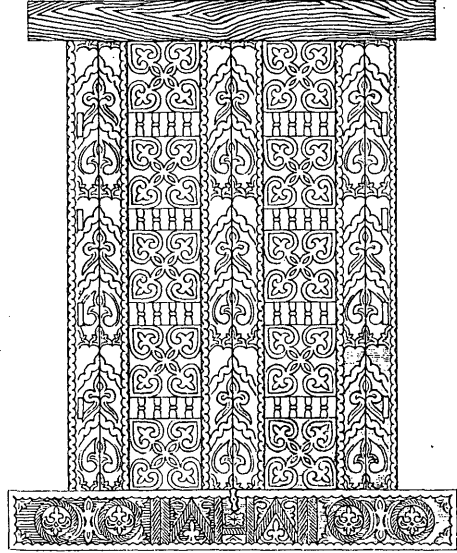
扉を固定する木の枠は左右2本の側柱(ボサガ *босаға*)、しきい(タプィルディルク *табылдырык*)、上部の板(マンダイシャ *Мандайша*)の4枚からなっている。枠の大きさはユルタの大きさによって変る。ふつう 70×140 cm から 98×175 cm までとされている。民博のものは内側が 70×140 cm である。また上部の板の幅は17cm、長さ118cmである。

木扉は観音開きになるように、木枠の幅の2分の1の幅になっている(民博のものは35cm)。木扉の表面(内側)は細かく彫刻されており、ユルタの主人が裕福であるかどうかは、まずこれによって知られる。文様は一樣ではない。しかし全体としては、なんの彫刻もないものが多い。

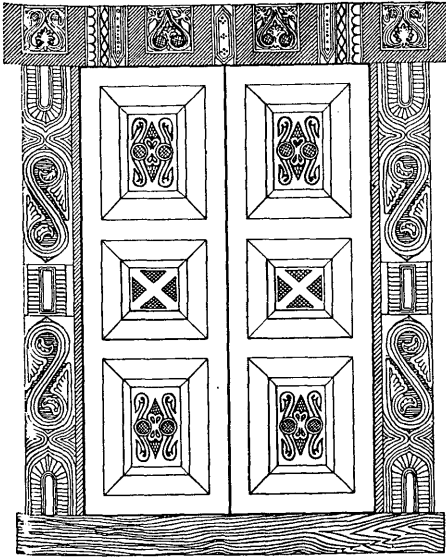
外側から木扉をおおうフェルトのカバー(キーズ・エシク *киіз есік*)はカザフ



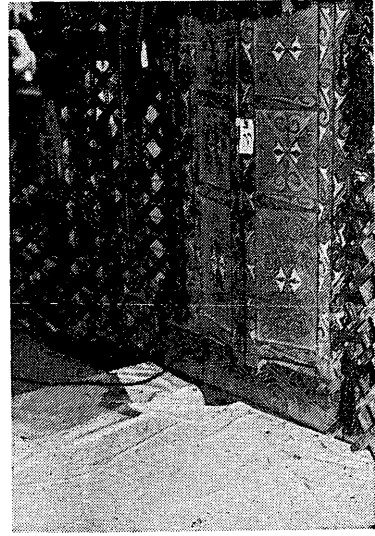
1



2



3



4

1, 2, 3 東部カザフスタンのもの。(МУКАНОВ による)

4 西部のアダイ族のもの。(民博所蔵)

図17 カザフのユルタの木扉

の天幕の必需品である。木扉はなくても、このカバーは欠かすことができない。扉を意味するカザフ語のエシク есик は、

クフティン Куфтин によれば、フェルト一般を意味するモンゴル語のエシグケ ешигке に由来しているという [МУКА-



図18 民博のカザフのユルタにおける
木扉カバーとシュイム・シー
(アシのむしろ)

нов 1981: 35]。これが「扉」の意味になったのは、扉の起源がフェルトであったからかどうか、このあたりの理由はよくわからない。もともと、ワインシュテインらが主張するように、このタイプの天幕がチュルク族の発明であって、これがモンゴル族に入ったものとすれば、クフティンの説明と矛盾することになる。カザフ語の中に、本来扉を意味する есик という語が、少なくとも11世紀のカシュガルのマフムドの辞書に入ったものとムカノフは指摘している[Муканов 1981: 36]。

フェルトの扉カバーは扉枠の幅より少し広く、長さは、上端がウイクの3分の1まで達し、シャンラクに結びつけられる縄がのびている。また内側はあざやかな文様のついたむしろ(エシク・チーэшик

чий) で飾られている。この装飾むしろ(アシを編んだもの)の扱い方にカザフ族とキルギス族の区別があるとされている。キルギスの場合、むしろの文様のある部分がウイクの下にあり、その下端は扉枠の上部までしか達しない。つまりフェルトの扉カバーの下部には文様がないのである。

カザフのユルタの木製骨組を外からおおうフェルトは3部分からなっている。すなわち、壁面をおおうもの(トゥイルリク туырлык)、天井をおおうもの(ウジュク үзік)、それにシャンラクをおおうもの(トゥンディク түндік)である¹⁾。

1) キルギス族ではカザフ族でいうシャンラクのことを тундик と称している[Толстов 1963: 225]。

トゥイルリクは4枚のフェルトからなり、わずかに台形をなしている。大きさは天幕の大きさによって変る。6枚カナト天幕の場合は下部が450cm、上部が300cm、高さは270cmほどある。民博のユルタの場合は上辺が277cm、下辺が360cm、高さ192cmである。トゥイルリクはケレゲ全体とウイクの約3分の1をおおっている。トゥイルリクの内部の上端はしばしばアプリケによって装飾されている。また縁には縁どり紐(ジエク жиек)が縫いつけられている。この作業は2名の女性によって行なわれる。つまりひとりは紐を編み、もうひとりはこれを縫いつけるのである。紐はラクダの毛糸でつくられる。

6枚カナトのユルタは3枚のトゥイルリクからなるが、横の一部は重なり合うようになっており、上端にはウイクにしばりつけるためにトゥイルリク・パウ туырлык бай とよばれる細い紐がつけられている。

トゥイルリクの外側からラクダの毛で編んだ縄(ベルデウ Белдеу)が締められる。これはユルタの扉枠に結びつけられる。ベルデウの上から文様や房で飾られた帯(ベルデウ・パウ Белдеу Бай)が締められることがある。

ウジュクは上下辺とも楕円形になっており、円錐形の上部を切りとった形をしている。6枚カナトのユルタの場合、2枚のウジュクで天井部をおおうことができる。ウジュクは3—4枚のフェルト地(ケセク кесек)からつくられる。ふつう1枚のウジュクは底辺が957cm、上辺が135cm、両側は各250cm、上辺から底辺まで最短の部分が230cmである。民博のユルタは、両側は各290cm、上辺

が209cm、底辺が960cmとなっている。これが2枚である。またトゥンディクは243cm×243cmである。

側壁のケレゲとトゥイルリクの間には文様をつけたアシのむしろ(シュイム・シー шым ши)が立てられる。これは冬期には保温の役割を果し、また内部装飾ともなっている。また冬期には、寒風が吹きこまないように、ユルタの裾まわりに厚手のフェルトが巻きつけられる。

[ユルタの組立て方]

まず建てるべき場所の草や石などを取りのぞき、風の向きなどを考えて扉の枠を固定する。扉枠の両側から、開いたカナトを立て、相互に幅のある紐で結び合わせ、ユルタのケレゲを形づくる。ユルタの中央部(キンディク кіндік, 文字通

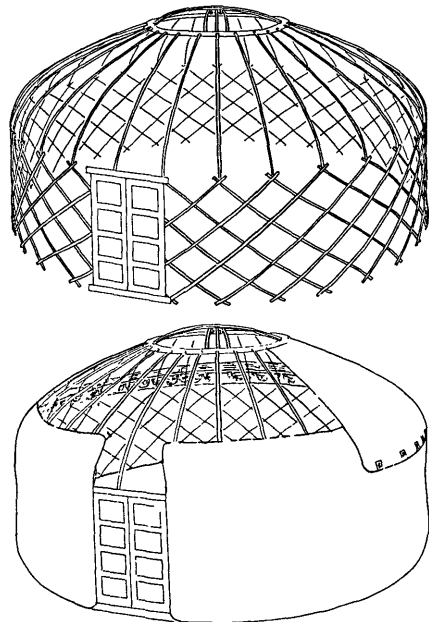


図19 カザフのユルタの組立て方
 上は骨組の部分、下はフェルトのかけ方。
 いずれも Муканов による。

りの意味は「臍の緒」に、先端が二股になった棹でシャンラクを持ち上げる。8枚カナトを越えるユルタの場合は、シャンラクはたいへん重いので2本の棹で支える。10枚カナト以上の場合には馬に乗った人がふたり、それぞれ鐙で棹を支えることになる。ユルタの天井が高く、シャンラクが重いからである。ウイクの尖った上端(カラム қалам)をシャンラクの穴にさしこみ、下端をケレゲの二股(Бас)に結びつけた。この場合の手順は、それぞれ反対の側からすることが重要である。例えば扉側とその反対側を同時に固定していく。こうしてユルタの骨組が完成する。

ついでウイクの下端あたりで文様のある帯(バスクール Баскур)をしっかりと巻きつけ、扉枠のところのウイクに結びつける。それからアシで編んだむしろを巻き、扉枠に木扉と扉カバーを下げ、上部をシャンラクに結びつける。ケレゲの上からトゥイルリクを、ウイクの下端の約3分の1をおおうようにかけて骨組にしばりつける。2枚のウジュクで天井をおおい、その下端はケレゲの上端に達するようにする。

最後に、シャンラクにそのおおい(ту-ндик)をかける。

【ユルタ空間のしきたり】

円錐形の天井をもつ円形のユルタ空間は、自由な床面積をつくるために最大限の工夫がなされている。生活用具や身のまわり品はできるだけ壁ぞいまたは天井や壁にかけて片づける。内部の仕切りはない。しかしユルタ空間の生活には古くからのしきたりがある。

ユルタの中央には炉(Ошак Ошак)

がある。かつてのカザフの生活では、炉は食物をつくり、また寒いときには暖をとるところでもあった。炉は古くから神聖な場所であると考えられた。今日でも炉は大切にされているが、しかしもはや象徴的である。暖い時期には、食物はユルタの外で用意され、寒いときには、人々はユルタではなしに、ブロック建の住居に住んでいる。

入口の正面、炉の奥は上座(Чолтөр)であって、来客があればこれに坐ってもらう。カザフ族には、「自分の分を知れ」という意味で、「ユルタに入ったときには、上座をめざしてはならない」(Есіктен кіріп, төрге озба)という言葉があるという。上座にはいちばん上等のフェルトやじゅうたんを敷き、長持やフェルトの袋、毛布、来客の肘当て(枕状のもの)、じゅうたんなどは、上座の奥の壁(ケレゲ)ぎわの台(Жук・Аяк жук аяк)上に積みあげられる。

上座(төр)という言葉は現代的建物でも、最もよく飾られた部屋をあらわす言葉として残っている。

扉のそばの空間はボサガ босага とよばれる。入口の向かって右側には、食器や食料箱などがおかれ、左側は馬具、鞍、その他牧畜に関連した物をおいた。扉の右手のЧолとボサガの間は老人と子どもの場所であった。一家の主人がベッドを利用するときには、そのベッドがここにおかれた。入口の左手、Чол近くの空間は、結婚した息子が老人と同居している場合には、カーテンで仕切られた若者夫婦のベッドがおかれた。ユルタに1家族しか住まない場合は、この空間は家族の人々の昼間休む場所とされた[Му-канов 1981]。

ベッドと上座の間には横に棹がわたされ、それに衣服などをかけた。入口の左右両側の壁(ケレゲ)の二股部分にはさまざまな袋物がかけられた。また壁面には刺繍したじゅうたん、アプリケなどがかけられ、天井からも刺繍した帯状の毛織物や房などが下げられ、ユルタの内部空間を飾った。ユルタ内部は遊牧民の生活感のあふれた空間であったのである。

文 献

- Азиатская Россия. т. I Земля и хозяйство
1914 *Азиатская Россия. т. II, Земля и хозяйство*. С. Петербург.
- Ахмедов, Б. А.
1965 *Государство кочевых узбеков*. Москва.
- Бартольд, В. В.
1968 История Турецко-монгольских народов. *Сочинения т. V.*, Москва, pp. 195-229.
- Баранов, С. Ф. и Кузьмина, Т. Я.
1930 Время Наступления Зрелости и половая жизнь женщин-казаков. В кн.: Руденко, С. И. (ред.), *Казаки*, Ленинград, pp. 73-98.
- Баялиева, Т. Д.
1972 *Доисламские верования и их пережитки у киргизов*. Фрунзе.
- Гафуров, Б. Г.
1972 *Таджики*. Москва.
- Дахшлейгер, Г. Ф. (ред.)
1980 *Хозяйство казахов на рудеже XIX-XX веков*. Алма-Ата.
- Еремеев, Д. Е.
1980 *На стыке Азии и Европы*. Москва.
- Зеланд
1915 Киргизы. В кн.: КРУБЕР, А. и др., *Азиатская россия*, Москва, pp. 324-332.
- ジョンキンソン
1983 「モスクワからブハラへの船旅」朱牟田夏雄訳・注 越智武臣解題・注『イギリスの航海と植民』(大航海時代叢書第Ⅱ期 17) 岩波書店, pp. 1-55.
- 国家民委民族問題 五种双書 編輯 委員会『中国少数民族』編写組
1981 『中国少数民族』人民出版社。
- КРУБЕР, А. и др.
1915 *Азиатская россия*. Москва
- Куфтин, Б. А.
1926 *Киргиз-Казаки. Этнологические очерки*. Москва
- Майдар, Д. и Пюрвеев, Д.
1980 *От кочевой до мобильной архитектуры*. Москва
- 松原正毅
1983a 『遊牧の世界 上』中央公論社。
1983b 『遊牧の世界 下』中央公論社。
- Муканов, М. С.
1981 *Казахская юрта*. Алма-Ата.
- Нусупбеков, А. Н. (ред.)
1979 *История казахской ССР, т. II*. Алма-Ата.
- Руденко, С. И.
1930 Очерк быта северо-восточных казаков. В кн.: Руденко, С. И. (ред.), *Казаки*, Ленинград, pp. 1-72.
- 佐口 透
1978 「東トルキスタンのカザーフ人」『月刊シルクロード』4(2): 39-43, 株式会社シルクロード。
- Султанов, Т. И.
1982 *Кочевые племена приаралья в XVI-XVII вв.* Москва.
- Токарев, С. А.
1958 *Этнография народов СССР*. Москва.
- Толстов, С. П.
1948 *Древний Хорезм*. Москва.
- Толстов, С. П. (ред.)
1963 *Народы Средней Азии и Казахстана, II*. Москва.
- Толыбеков, С. Е.
1971 *Кочевое общество казахов в XVII-начале XX века*. Алма-Ата.
- Шипова, Е. Н.
1976 *Словарь тюркизмов в русском языке*. Алма-Ата.